玉東町文化財調査報告　第３号

（伝）世尊寺跡

１９９５年

熊本県玉名郡玉東町教育委員会

玉東町文化財調査報告　第 3 号

(伝) 世尊寺跡

1995年

熊本県玉名郡玉東町教育委員会

序　　文

玉東町(ぎょくとうまち)では平成７年１月に『玉東町史』を刊行いたしました。1400頁を越える大書ですが、その中に世尊寺(せそんじ)の事も収められています。

「国郡一統誌」や「肥後国誌」にも寺名が記されたこの寺は、本尊と伝えられる仏像が、町史編纂時の調査で、鎌倉時代のものである事が判明するなど、これまでにも話題を提供しました。

このような事から世尊寺の解明が待たれておりましたが、今回、発掘調査の機会を得ることが出来ました事は喜びにたえません。

この調査報告書が文化財に対する理解を深め、研究・保護のために活かされれば幸いに思います。

調査に際して御指導・御協力を頂きました田邊先生をはじめとする関係者の方々に心から御礼を申し上げます。

平成７年３月３１日

玉東町教育長　竹　下　晨　吾

例　言

1. 本書は、熊本県玉名郡玉東町木葉・世尊寺にある『世尊寺跡』の発掘調査報告書である。
2. 調査は玉東町教育委員会が主体となり、田邊哲夫氏を中心に、一部、大田幸博氏の協力を得て、試掘と本調査を行った。
3. 遺物の整理は、田邊氏が総括した。
4. 出土遺物の鑑定は、大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）に依頼した。
5. 出土遺物と遺構の写真撮影は前田一生氏に依頼した。
6. 本書の執筆は大田氏の協力を得て田邊氏が行い、第Ⅰ章第2節を清田祐幸が、付論を清田之長氏が担当した。
7. 本書の編集は田邊氏が総括した。

目　　次

1．調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第１節　調査の組織 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２節　調査の工程 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第３節　調査の目的 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

2．遺跡の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第１節　玉東町の位置と地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第２節　世尊寺について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第３節　世尊寺と仏像 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

3．調査の成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第１節　試掘結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第２節　調査結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

4．出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

5．ま と め ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44

〔付論〕 世尊寺について　　清田之長 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47

玉東町世尊寺発掘に伴うシンポジウム開催（記録） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・49

挿 図 目 次

第１図　玉東町位置図・・・・・・・・・・2
第２図　玉東町地形図・・・・・・・・・・3
第３図　世尊寺跡周辺地形図と字図・・・5
第４図　試掘地点位置図・・・・・・・・・7
第５図　世尊寺跡周辺地形図・・・・・・8
第６図　調査区全体図・・・・・・・・・・9
第７図　調査区中央部実測図・・・・・・10
第８図　建物跡実測図・・・・・・・・・・11
第９図　建物１実測図・・・・・・・・・・12
第10図　建物２実測図・・・・・・・・・・13

第11図　出土遺物実測図①・・・・・・・・15
第12図　出土遺物実測図②・・・・・・・・17
第13図　出土遺物実測図③・・・・・・・・19
第14図　出土遺物実測図④・・・・・・・・21
第15図　出土遺物実測図⑤・・・・・・・・23
第16図　出土遺物実測図⑥・・・・・・・・25
第17図　出土遺物実測図⑦・・・・・・・・28
第18図　出土遺物実測図⑧・・・・・・・・29
第19図　出土遺物実測図⑨・・・・・・・・31
第20図　出土遺物実測図⑩・・・・・・・・33
第21図　出土遺物実測図⑪・・・・・・・・35
第22図　出土遺物実測図⑫・・・・・・・・38
第23図　出土遺物実測図⑬・・・・・・・・40
第24図　出土遺物実測図⑭・・・・・・・・43
第25図　世尊寺周辺地形図と地籍図・・・48

表　目　次

第１表　出土遺物観察表①・・・・・・・・14
第２表　出土遺物観察表②・・・・・・・・16
第３表　出土遺物観察表③・・・・・・・・18
第４表　出土遺物観察表④・・・・・・・・20
第５表　出土遺物観察表⑤・・・・・・・・22
第６表　出土遺物観察表⑥・・・・・・・・24
第７表　出土遺物観察表⑦・・・・・・・・26
第８表　出土遺物観察表⑧・・・・・・・・27
第９表　出土遺物観察表⑨・・・・・・・・30
第10表　出土遺物観察表⑩・・・・・・・・32
第11表　出土遺物観察表⑪・・・・・・・・34
第12表　出土遺物観察表⑫・・・・・・・・36
第13表　出土遺物観察表⑬・・・・・・・・37
第14表　出土遺物観察表⑭・・・・・・・・39
第15表　出土遺物観察表⑮・・・・・・・・41
第16表　出土遺物観察表⑯・・・・・・・・42
第17表　出土遺物編年表・・・・・・・・・45

写　真　図　版

図版１　調査区伐採作業①
図版２　調査区伐採作業②
図版３　調査区北側
図版４　建物１・建物２
図版５　建物２　根固め石（Ｓ７）
図版６　建物２　根固め石（Ｓ14）
図版７　調査区東側から西側を望む
図版８　井戸
図版９　試掘地点（手前の平場。中央右側の藪が本調査区）
図版10　建物１と石碑
図版11　出土遺物①
図版12　出土遺物②
図版13　出土遺物③
図版14　出土遺物④
図版15　出土遺物⑤
図版16　出土遺物⑥
図版17　出土遺物⑦

1．調査の概要

第1節　調査の組織

調査主体　玉東町教育委員会

調査責任者　稲村純雄（玉東町長）

調　査　者　田邉哲夫　大田幸博

協　力　者　地権者　玉東町文化財保護委員

調査事務局　中島好幸（社会教育課長）　清田祐幸（社会教育課長補佐）

西浦仁敏（社会教育課主事）　清田博之（社会教育課主事）

発掘従事　松永良政　田尻　明　境　一広　西村敏光　清田林二　清田　功

古財国義　井尻国雄　高木三徳　東　誠一　山野ふみ　早川アツ子

山野ミサヲ　清田ハルエ　竹下文代　前田一生　森田洋介　永田六三子

青木祐子　青木勝哉

第2節　調査の工程

〔1〕 平成6年10月10日に試掘を行った。その結果、通称、世尊寺跡地の竹藪のみに本調査の範囲をしぼる事ができた。竹藪の段落ちとなる所にも試掘溝を入れたが、地山のローム層を1m近く掘り込むほどの造成がなされている所もあり、遺構は存在しなかった。表土から、わずかに数点の中世遺物が出土したのみであった。

〔2〕 本調査は暮れもおしせまった平成6年12月16日から開始した。調査区は全面、竹藪に覆われており、その伐採作業は困難を極めた。

〔3〕 調査は田邉哲夫氏が総括し、玉東町教育委員会の職員全体で行った。さらに休日には大田幸博氏が調査に加わった。

〔4〕 調査区を大幅にしぼり込む事ができたので、12月29日に調査を終了した。

（清田祐幸）

第3節　調査の目的

世尊寺の年代把握と寺跡の範囲確定にあった。元来「国郡一統誌」や「肥後国誌」に世尊寺跡として、年代不詳という旨の記載があった。これが「玉東町史」編纂時の悉皆調査で、世尊寺跡に放置されていたという仏像が鎌倉期のものと鑑定された事により、寺自体が中世に遡る可能性が生じたのである。

その様な意味で、世尊寺跡解明の機会が待たれる所であったが、町編纂事業の完成年時を迎えた平成6年度に、関係者の努力で調査の機会を得る事ができた。

2．遺跡の概要

第１節　玉東町の位置と地理的環境

〔1〕 行政域

玉東町は熊本県の北部にあり、玉名郡では東南部に位置する。行政域では北に菊水町（玉名郡）と鹿央町（鹿本郡）、東は植木町（鹿本郡）、西は玉名市と天水町（玉名郡）、南は熊本市と接することになる。

東西約４km、南北約９kmで、総面積は24.40km²である。町役場は東経130度38分、北緯32度55分の位置にある。

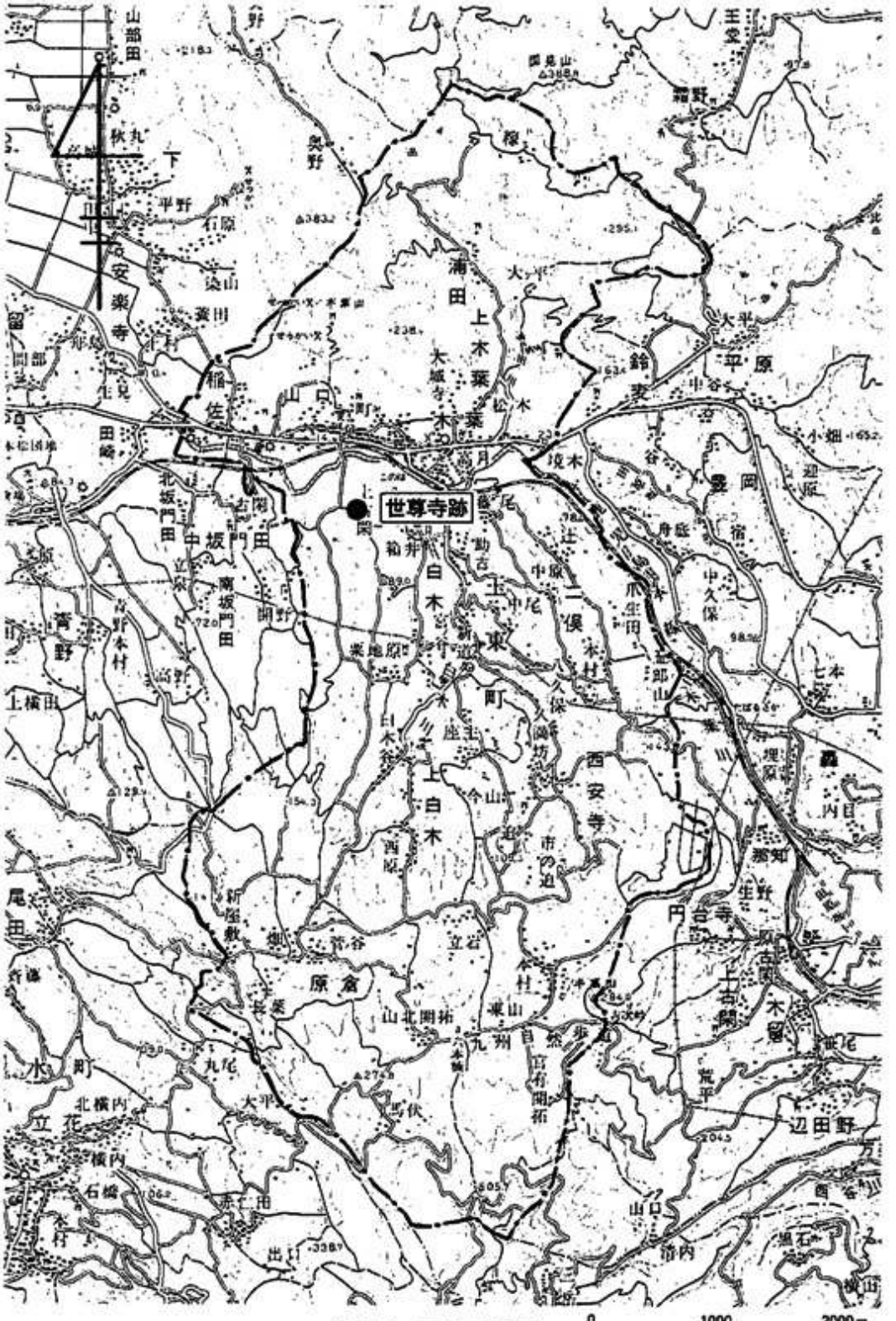
〔2〕 地形

北部に木葉山や鹿央町との境をなす国見山（標高389m）の山々が連なり、一方で南部は金峰山・三ノ岳（標高681.3m）からの緩やかな斜面が広がっている。

町の中央から、やや北寄りに低地があり、そこを木葉川が西流し、北からは浦田川が、南からは白木川が流入している。

町並みは東西にひろがり、街のすぐ南部をＪＲ九州の鹿児島線と国道208号が並走する。

第１図　玉東町位置図



第２図　玉東町地形図

第２節　世尊寺について

〔1〕 町内の木葉地区に「世尊寺」という字名を残す所があり、その一角(字世尊寺416番地)に、戦後の一時期まで世尊寺という小さなお堂があった。

廃寺になった後は竹藪に覆われたが、当時のお堂の礎石が、わずかに寺跡としての面影を残していた。

〔2〕 地形的にみると寺跡は山裾の一隅で、北側の水田地帯より比高差にして20m程高い所にあり、南側背後に丘陵の山腹を負う事になる。周辺の集落からは、やや離れており、一見すれば、里の寺に対する奥の院という感じがする。

〔3〕 現在、玉名市の蓮華院に安置されている仏像の中に、この世尊寺跡から持ち込まれたものがある。それまでお堂に祀られていたものという。これが後述するように、鎌倉時代の仏像という鑑定結果がでたのである。従って、この事を受けて、昭和60年の初め頃、地権者の手によって「世尊寺跡」という寺名を刻んだ石碑が建立された事もあった。しかし、寺跡の顕影は一時的なもので、その後、再び、藪の中に覆われる事になった。

〔4〕 今に残る世尊寺跡と江戸期の文献に記された世尊寺の関連性は、今回の発掘調査で、大きな疑問として残った。

第３節　世尊寺と仏像

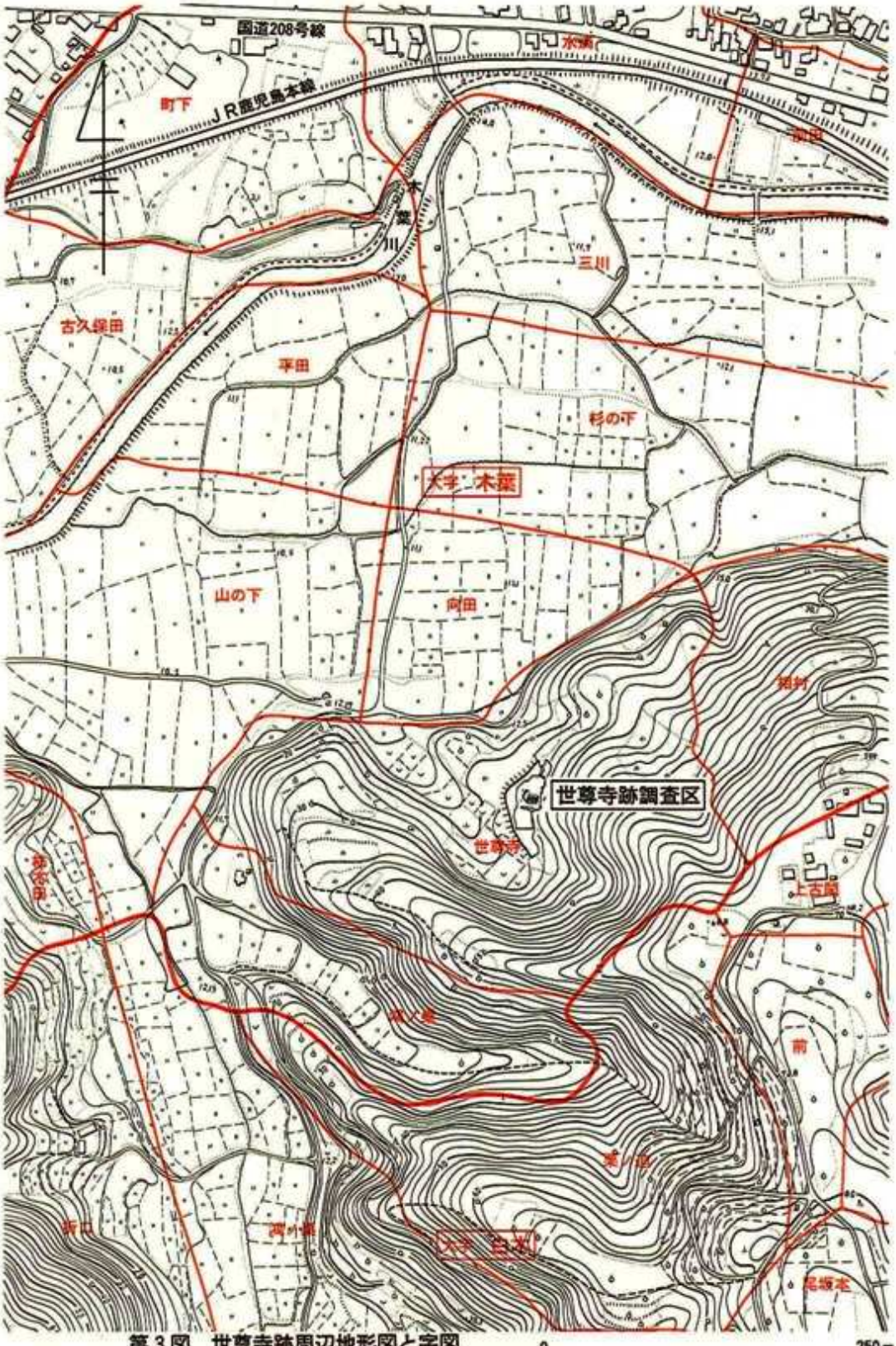
〔1〕 本尊と伝えられる木造薬師如来坐像及び日光・月光菩薩や十二神将像は、同寺の廃絶後、玉名市の蓮華院誕生寺に安置されている。本尊は鎌倉時代の作で、日光・月光両菩薩等は室町時代の作である。

〔2〕 本尊の現状

桧材・寄木造・彫眼の漆箔・彩色像であるが、後世、幾度かの修理が加えられていて、現在の彩色・漆箔等は随分新しい補修によるものである。両手先も後補である。特に東部は朽損が著しかったとみえ、肉髻部や後頭部の螺髪は無くなっている。

顔面部は、体幹部の衣文線の流れるような手際の良い処理に較べて、どこか朴訥な感じがありバランスを欠くが、それは稚拙な修理によるものと思われる。ただ、顔面部の朴訥さは、特に薬師如来像に限って、阿弥陀如来などのように円満具足の慈愛に満ちた相好ではなく、厳しく造られている場合もあるので、もともとこのような表情に近かったことも考えられる。

このように表面から本像をみると、後世のけばけばしい漆箔や彩色から、いかにも朴訥な地方作のように見えるが、像底から見ると木目の揃った良質の檜材を用い、木寄法も本格的である。また、内刳りは表面の起伏に沿った凹凸で、部材の厚みをほぼ均一にしているし、鑿痕をきれいに浚えて滑らかに仕上げるなど、丁寧な仕事ぶりが認められる。



第３図　世尊寺跡周辺地形図と字図

こうしたオーソドックスな仕事ぶり、髪際線の弛みが少ないこと、側面観の量感の豊かさなどからみて、鎌倉時代前期から中期にかけての都流の優れた技術をもった仏師の作と見られる。

なお、膝の矧目には、享保年間の修理銘があり、胎内には大正時代の修理銘が打ち付けられている。修理銘や膝裏の墨書銘（大正時代）は世尊寺の創建を養老年間などとする。何か言い伝えがあったかもしれないが、大正時代の墨書銘だけしかなく、にわかに信じがたい。

伝来など謎は多いが、城北地域の中世史を考える上でも注目すべき仏像の一つである。

〔参考文献：『玉東町史』通史編P.235～P.236　大倉隆二　著〕

薬師如来坐像（木造）

現所在地：玉名市築地　逍華院誕生寺

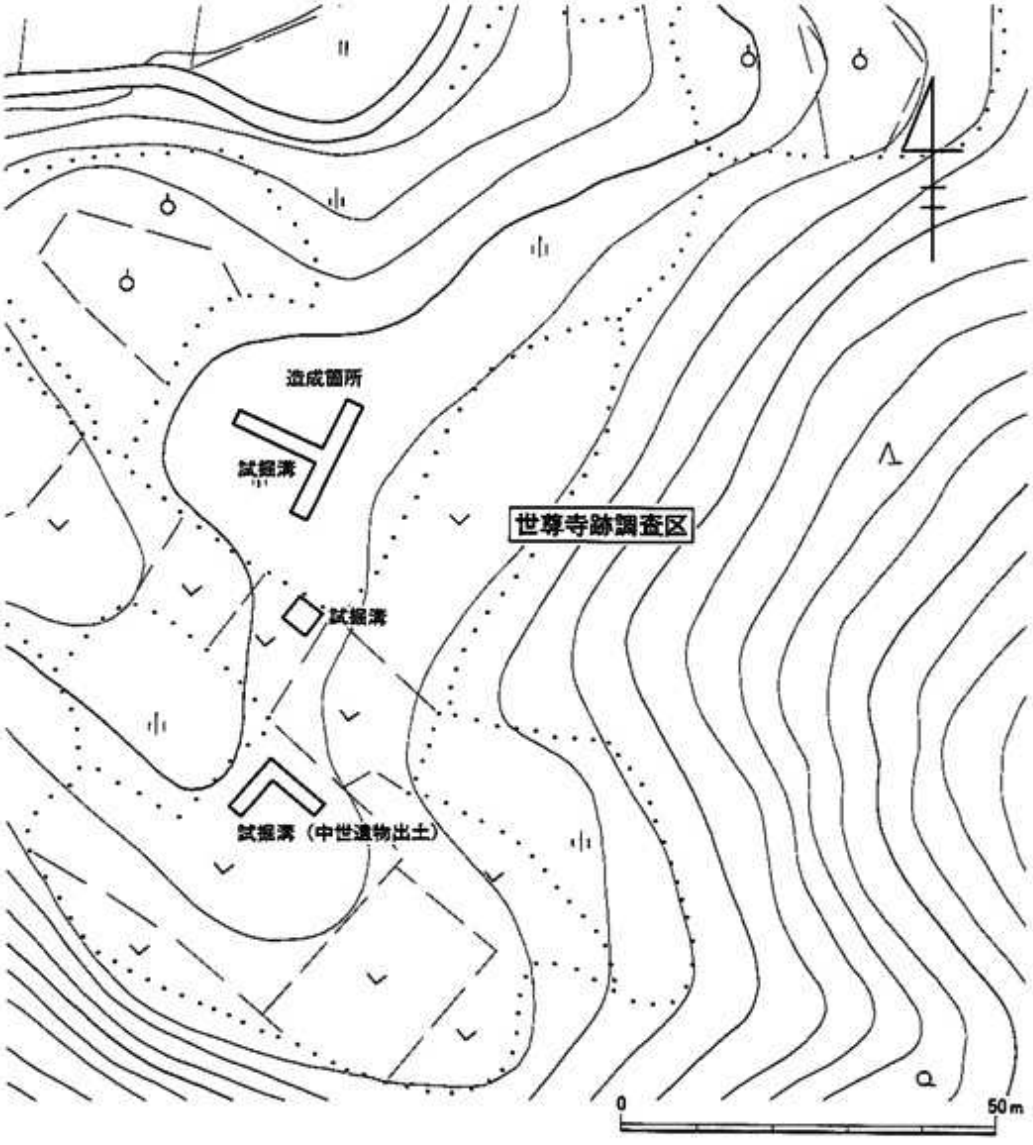
時代：鎌倉時代中期　　像高：91.7cm

3．調 査 の 成 果

第１節　試掘結果

〔1〕 平成６年10月10日に一帯で重機を導入して試掘を行う。

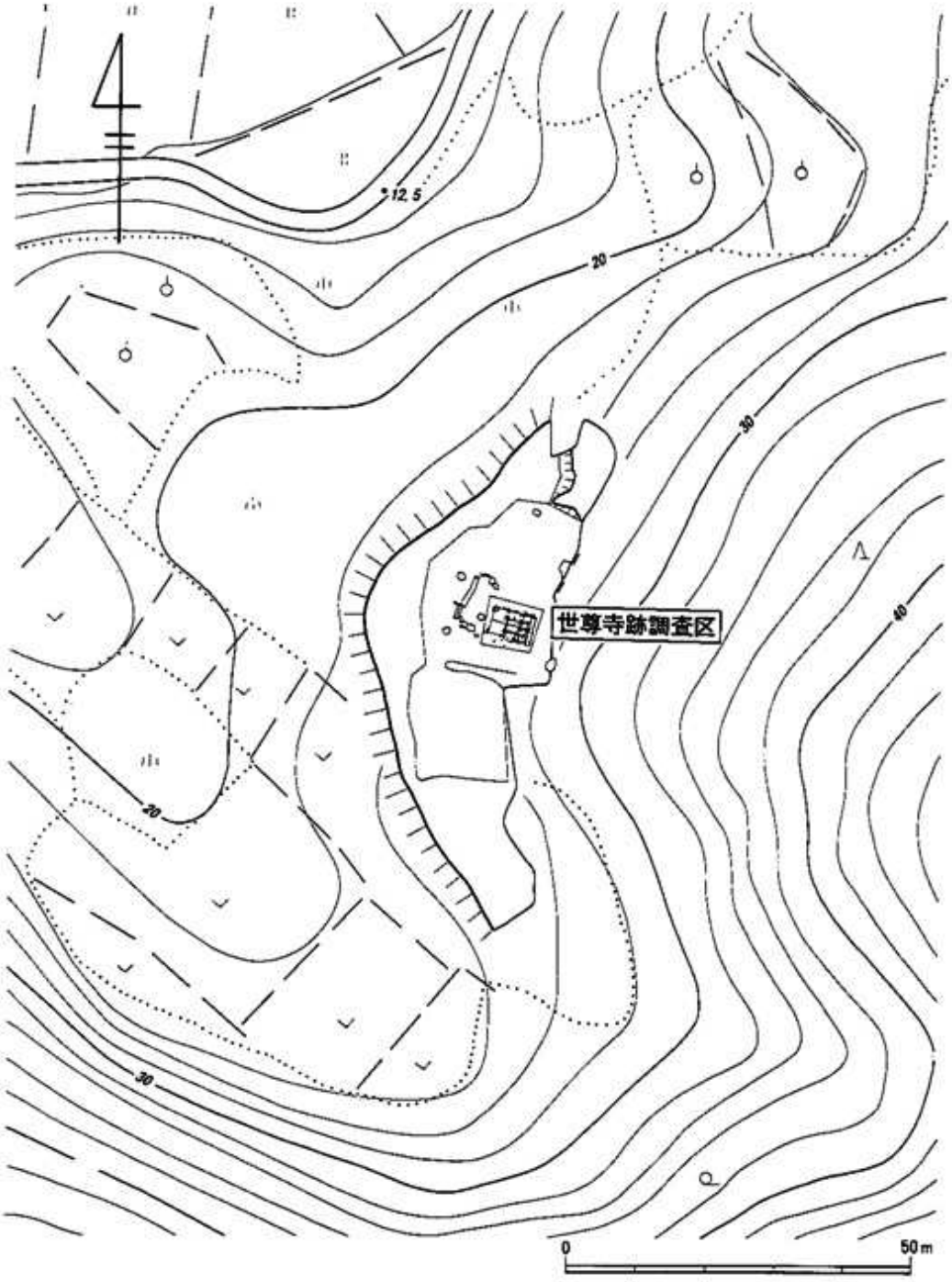
〔2〕 寺域の広がりを予想して、現・世尊寺地以外に試掘溝（３ヶ所）を入れた。その結果、本体部分は石碑周辺に限られるとの判断をした。試掘溝では、一部から中世遺物の出土を見たものの、遺構の検出はなかった。後世における農地耕作のため大幅な造成作業が行なわれていた箇所もあった。



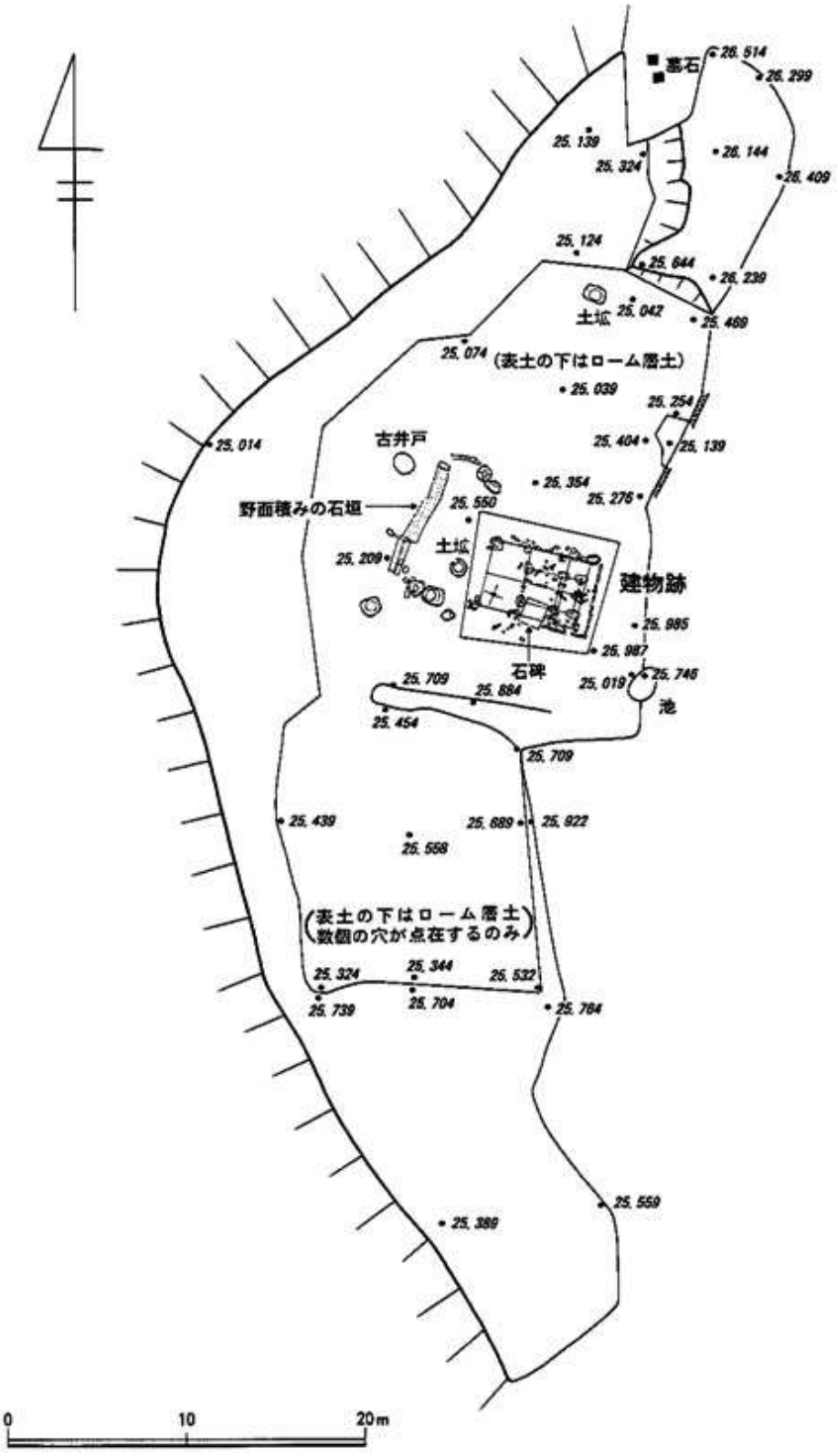
第４図　試掘地点位置図

第２節　調査結果

〔1〕 南北41ｍ、東西28ｍの範囲を全掘した。その結果、時代は無関係として、一応、寺跡としての遺構が残っているのは調査区の中央部分に限られる事がわかった(東西・南北14ｍの範囲)。

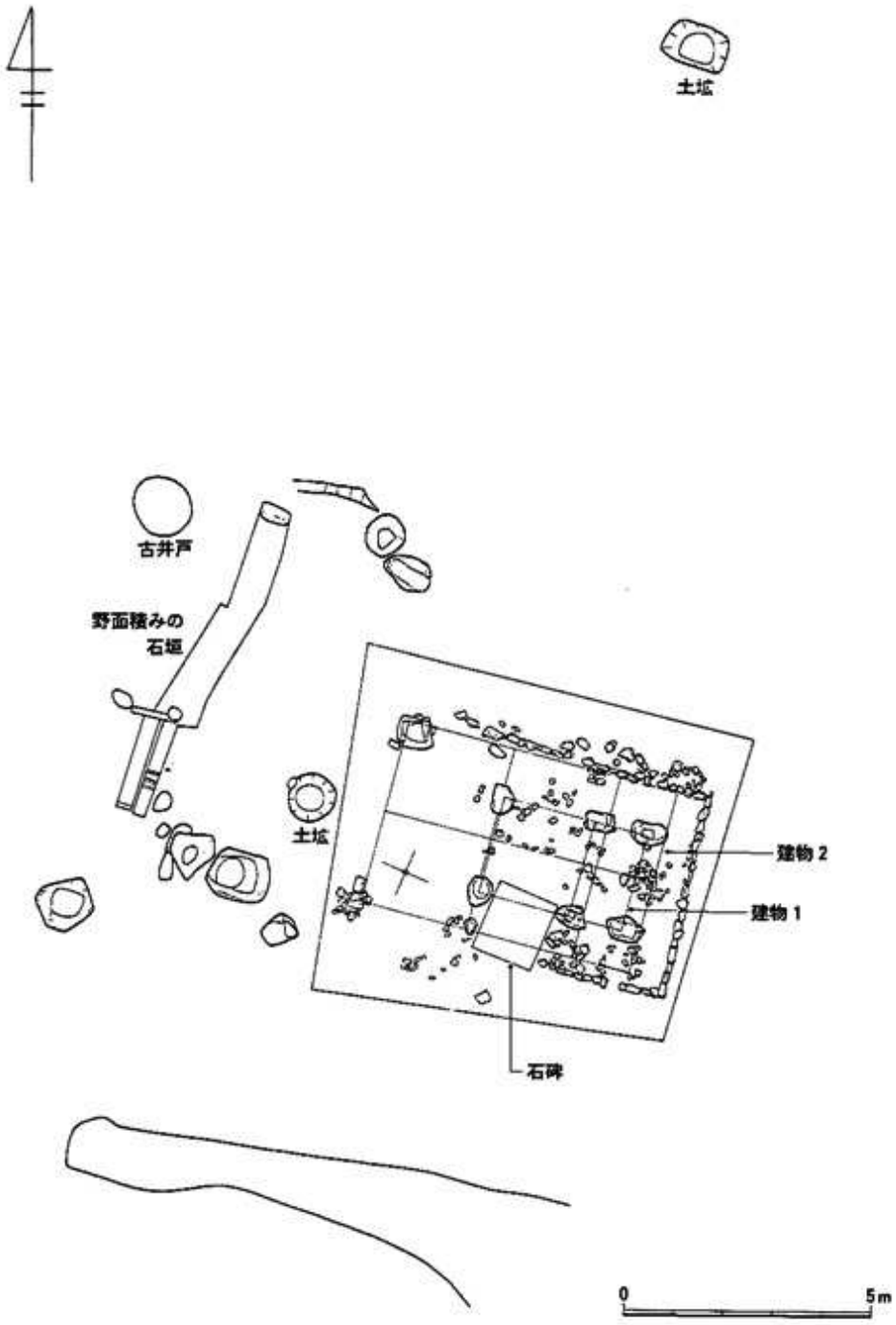


第５図　世尊寺跡周辺地形図


墓石
26.514
26.299
25.139
25.324
26.144
26.409
25.124
25.644
26.239
土坑
25.042
25.469
25.074
(表土の下はローム層土)
25.039
25.254
25.014
古井戸
25.404
25.139
25.354
25.276
野面積みの石垣
25.550
土坑
25.209
建物跡
25.985
25.987
石碑
25.709
25.684
25.019
25.746
池
25.454
25.709
25.439
25.689
25.922
25.558
(表土の下はローム層土
数個の穴が点在するのみ)
25.324
25.344
25.532
25.739
25.704
25.764
25.559
25.389
0
10
20m

第6図　調査区全体図

〔2〕 その他については、表土の下はローム層土の地山で、予想された墓穴などは一基もなかった。唯一、近世の土坑が検出されたのみである。



第７図　調査区中央部実測図

〔3〕 検出された礎石は40～50年前まで現存していた寺のもので、６個が現存していた。東西方向に主軸をもち、梁行２ｍ・桁行３ｍの小さなお堂である。梁行１間・桁行２間で、桁行の柱間は1.1ｍと1.9ｍとなる。これを建物１とする。

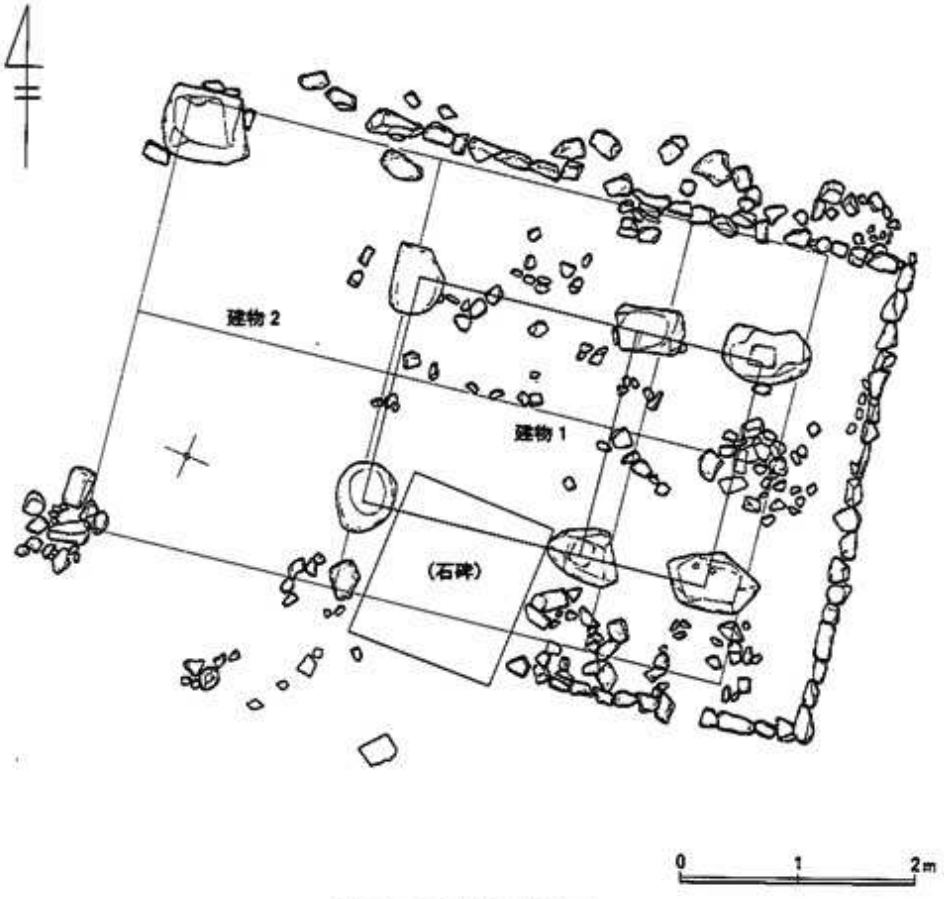
〔4〕 建物１は粘土を突き固めた基壇上に存在する。基壇は東西６ｍ、南北４ｍの大きさで、縁石にふちどられ、長方形をなしている。高さは15～20cm程である。

〔5〕 この基壇を精査したところ、礎石を抜き取った跡が10個検出された。いずれも環状に巡る根固め石が残っていた。これは建物１に先行するもので、ここでは建物２とする。

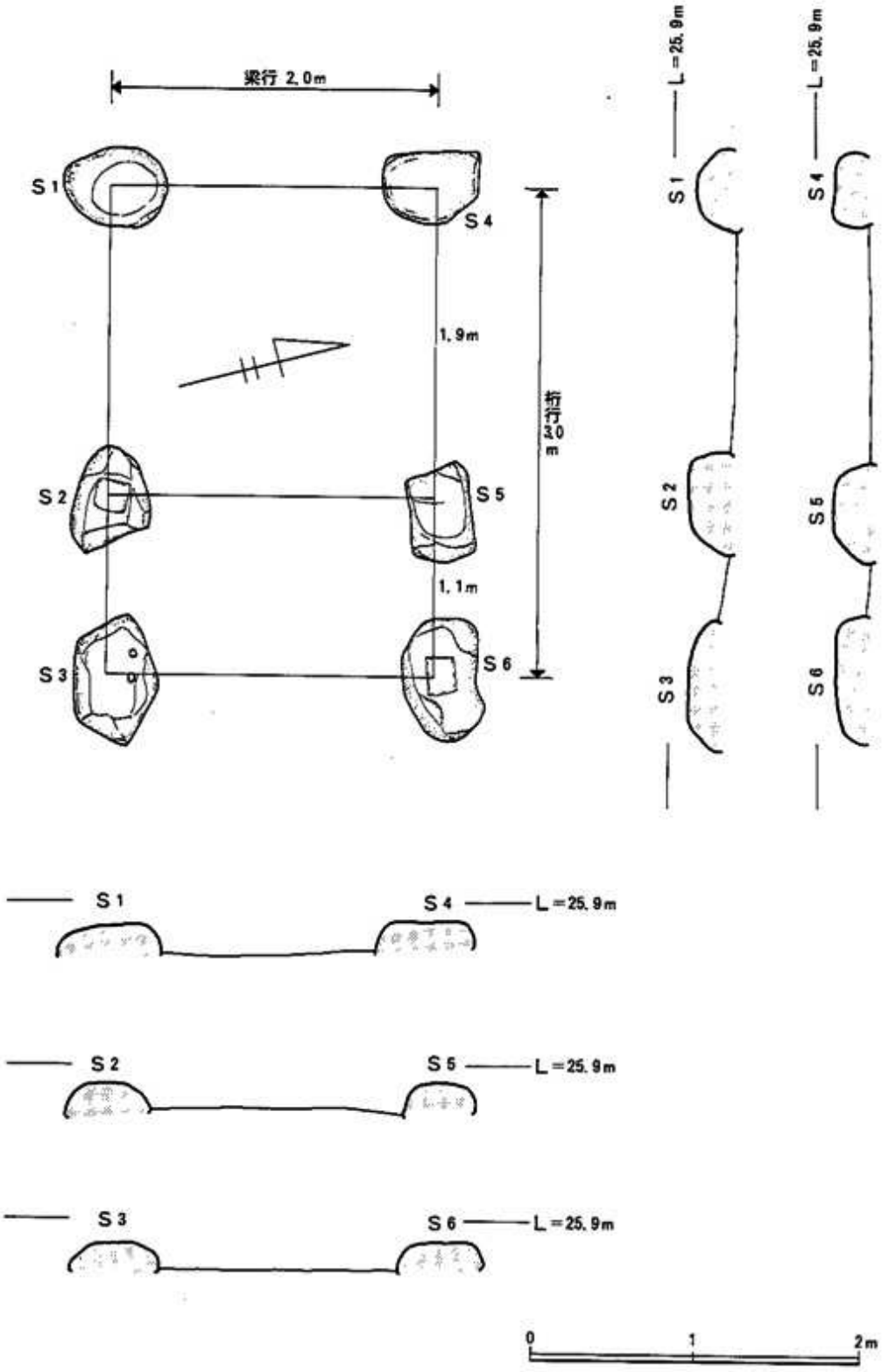
〔6〕 建物２の全体は把握できないが、建物１よりも一回り大きいことが確実である。梁行3.8m、桁行5.6m程になるものと思われるが、北東隅の礎石(現存)が復元図面に乗らない。

〔7〕 建物２の基壇は、建物１のものよりもさらに北側へ広がっていることが判明した。この事により建物１は規模を縮小して再建されていることが判る。

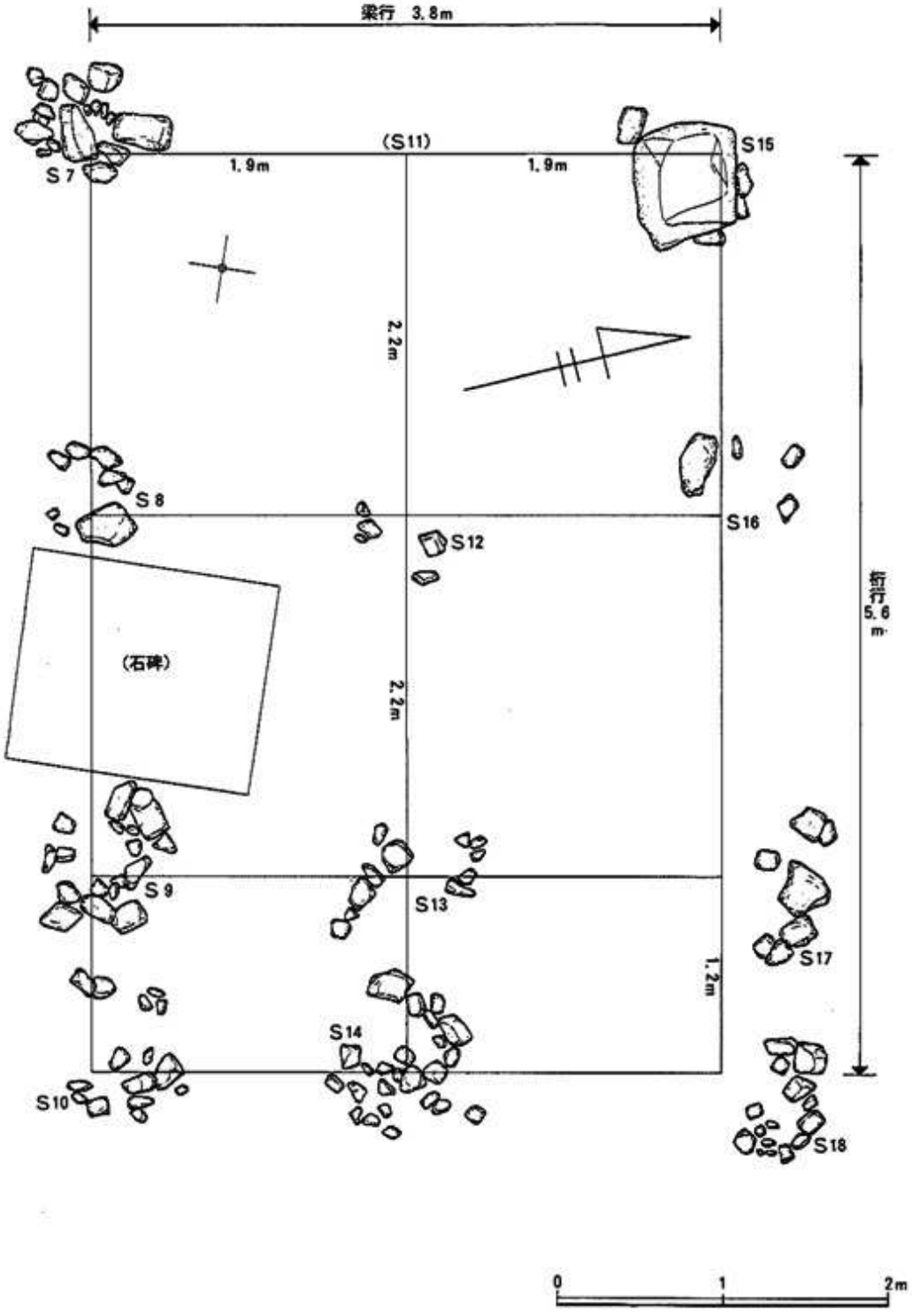
〔8〕 建物２に伴う基壇周辺は地山であり、これより下層の遺構の存在は考えられない(基壇土に遺物の混入はなかった)。



第８図　建物跡実測図


梁行 2.0m
S1
S4
1.9m
桁行 3.0m
S2
S5
1.1m
S3
S6
L=25.9m
S1
S4
L=25.9m
S2
S5
L=25.9m
S3
S6
L=25.9m
0
1
2m

第9図　建物1実測図


梁行 3.8m
(S11)
1.9m
1.9m
S7
S15
2.2m
S8
S16
S12
(石碑)
2.2m
桁行 5.6m
S9
S13
S17
1.2m
S14
S10
S18
0
1
2m

第10図　建物２実測図

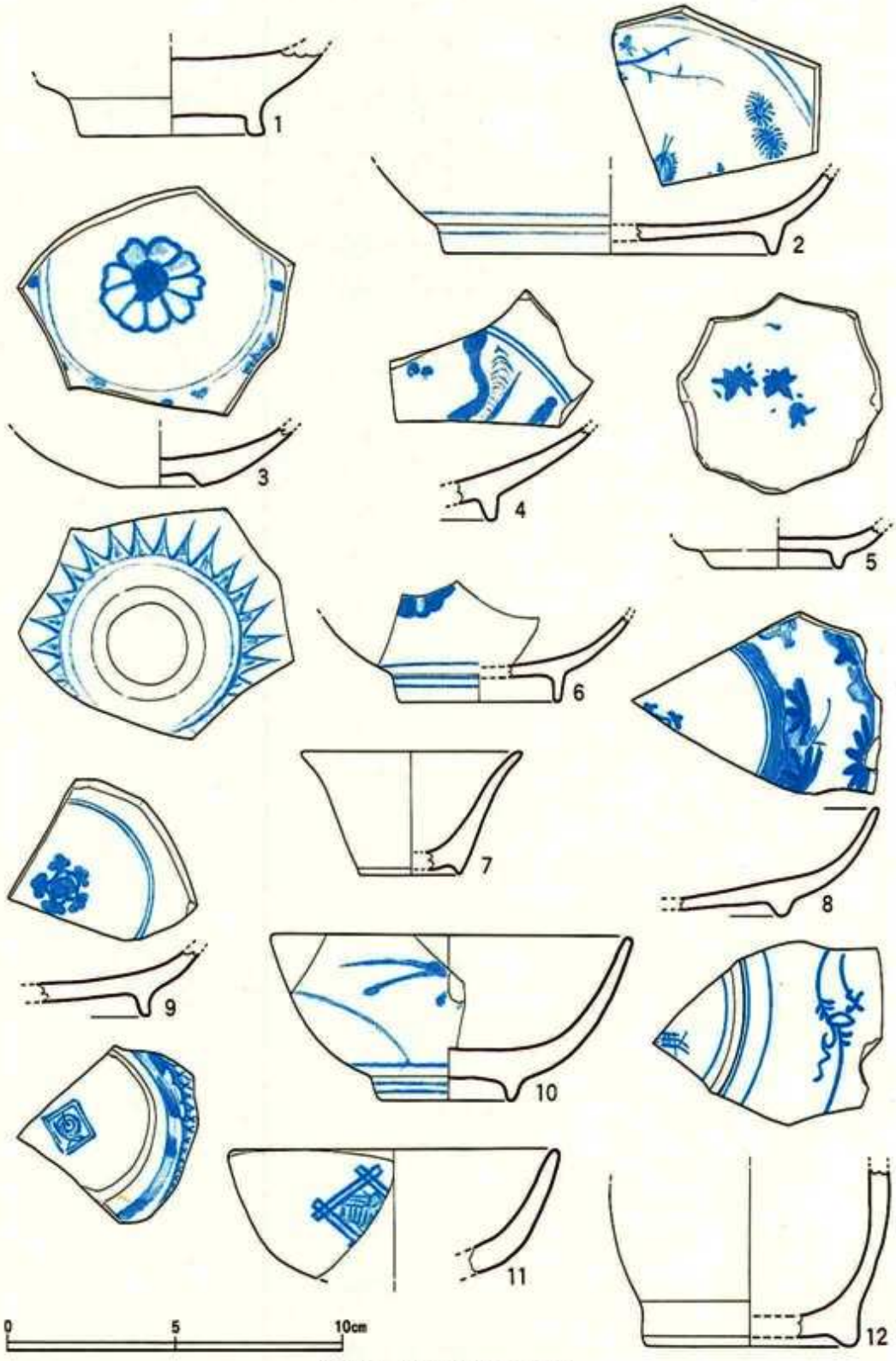
4．出土遺物

多くの遺物が出土した。その中で、明治～昭和のものを除くと、大半は肥前系の窯で焼かれた18世紀代の陶磁器であった。

一部の中世遺物については、試掘の際に本調査区・周辺のトレンチから出土したものである。表土に混入していた。

No.	器　種	形態の特徴	文様・手法・調整	備　考
1	青　磁 （碗） 中国 13C～14C前半	高台径　5.6cm 高台高　5mm 器厚　底部　17mm 体部下位　10mm	――	〔釉色〕　緑黄色。 〔施釉〕　高台の畳付きと外底面のみ無釉。 〔胎土〕　灰白色。
2	染　付 （皿） 中国 15C後半 ～16C中葉	復元高台径　10cm 高台高中央3.5mm 端部7mm 器厚　底部　4.5mm 体部中位　3mm 下位　4mm	〔内器面〕 2条の界線。 松の木と騎馬人物文様。 〔外器面〕 2条の界線。唐草文様。	高台の内側にヒビ割れ。 〔窯〕　景徳鎮。 〔呉須〕　青黒色（やや薄目）。 〔釉色〕　白青黄色。 〔胎土〕　白黄色。
3	染　付 （皿） 中国 16C前半～中葉	蕎麦皿。 底径　2.4mm 高台高　3.5mm 器厚　底部　5mm 体部中位　4mm 下位　8mm	〔内器面〕 2条の界線。中央に直径3cmの花弁（9枚）文様。	〔呉須〕　内器面は黒青色。 外器面は薄青白色。 〔施釉〕　外底面の畳付き部分のみ無釉。
4	染　付 （皿） 肥前系 17C中葉	器厚　体部中位　4mm 下位　7mm 底部　7mm 高台高　7.5mm	〔内器面〕 2条の界線。文様。	器面に光沢有り。 〔呉須〕　薄青白色。
5	染　付 （皿） 肥前系 1690年～ 18C前半	手塩皿。 高台径　3.9cm 高台高　5mm 器厚　底部　4mm 体部下位　4mm	〔内器面〕 紅葉文様（コンニャク印判）	貼り付け高台。 〔呉須〕　薄青白色。
6	染　付 （碗） 肥前系 1670～1710年代	復元高台径　4.9cm 高台高　7mm 器厚　底部　3.5mm 体部中位　2.5mm 下位　4mm	〔外器面〕 3条の界線。文様。 〔外底面〕 1条の界線。	〔呉須〕　青黒色。
7	白磁（?） （杯） 18C前半	復元口径　6.6cm 復元高台径　3.1cm 器厚　体部上位　2mm 中位　3mm 下位　6mm	――	〔釉色〕　白灰色。 〔胎土〕　白色。
8	染　付 （皿） 肥前系 18C前半	器厚　体部上位　2.5mm 中位　4mm 下位　6mm 底部中央　3.5mm 端部　5mm	〔内器面〕 2条の界線。やつで文様。 〔外器面〕 3条の界線。曲線文様。 〔外底面〕 1条の界線。 「大明年製」の「製」の文字。	〔呉須〕　青黒色。

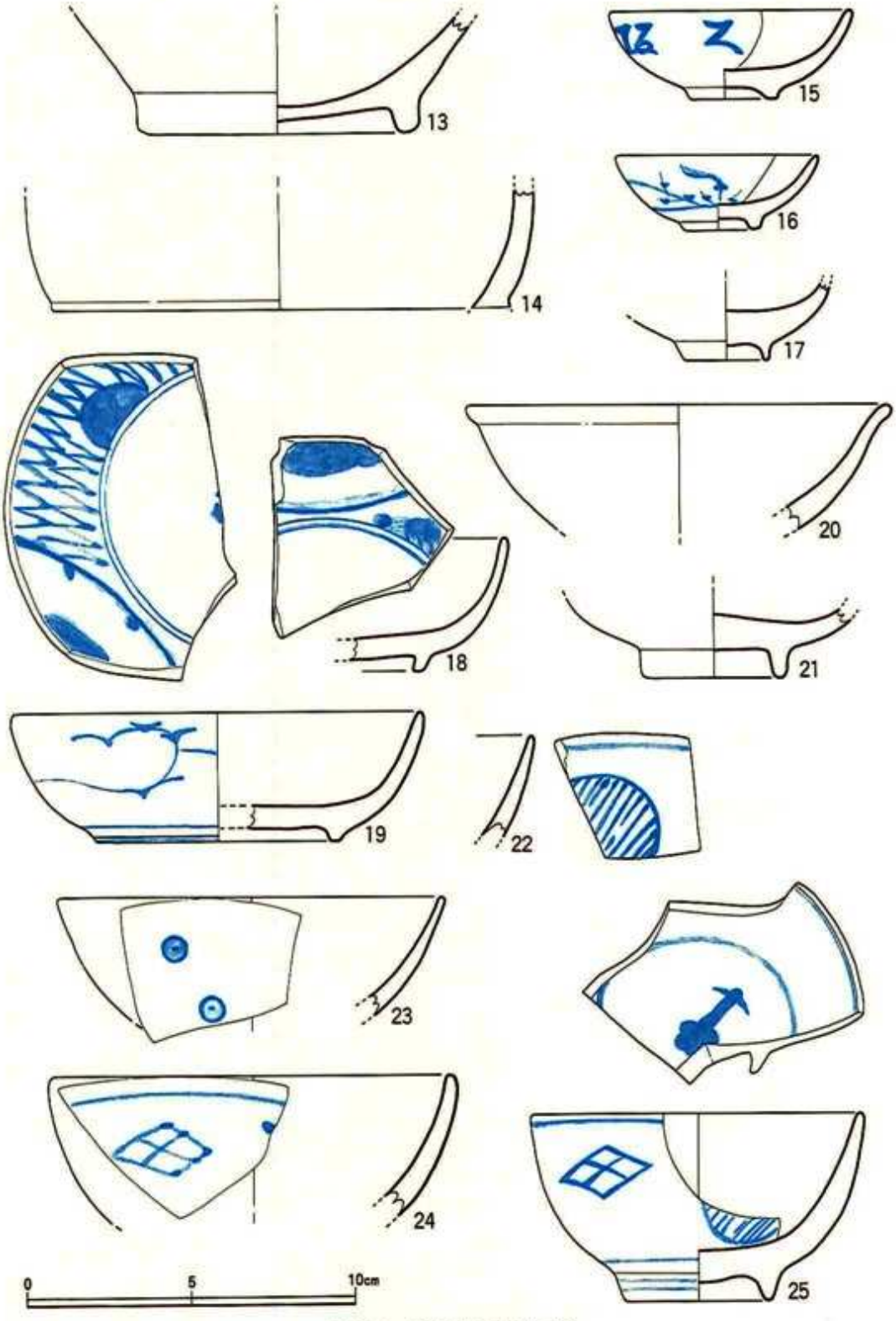
第1表　出土遺物観察表①



第11図　出土遺物実測図①

No.	器　種	形態の特徴	文様・手法・調整	備　　考
9	染付 (皿) 肥前系 18C前半	器厚　体部下位　6mm 底部中央　5mm 端部　6mm 高台高　7mm	〔内器面〕 2条の界線。コンニャク印判による五弁花文様。 〔外器面〕 2条の界線。文様。 〔外底面〕　渦福文字。	〔呉須〕　内器面は薄青黒色。外器面と外底面は青黒色。
10	染付 (碗) 肥前系 18C前半～中葉	復元口径　10.8cm 高台径　4cm 器厚　体部上位　3mm 中位　5mm 下位　6mm	〔内器面〕 1.4cm幅の蛇の目釉剥ぎ。 〔外器面〕 3条の界線。線描き文様。	〔呉須〕　青緑色。
11	染付 (碗) 肥前系 18C前半～中葉	復元口径　9.9cm 器厚　体部上位　4mm 中位　6mm 下位　8mm	〔外器面〕 コンニャク印判による菱形文様。	〔呉須〕　薄青黒色。
12	青磁 (花瓶) 肥前系 18C	復元高台径　8.3cm 器厚　底部　6.5mm 体部中位　6mm 下位　4.5mm	――――	仏神前用(?) 〔釉色〕　緑白色。 〔施釉〕　外器面と外底面に施釉。高台畳付きは無釉。
13	白磁 (瓶 ?) 肥前系 18C	内器面に2条の被線。 高台径　8.6cm 高台高　7mm 器厚　底部中央　5mm 端部　6mm 体部中位　6mm 下位　9mm	――――	〔釉色〕　白灰色。 〔施釉〕　外器面と外底面に施釉。高台畳付きは無釉。
14	白磁 (瓶 ?) 肥前系 18C	復元底径　13.9cm 器厚　体部中位　6mm 下位　8mm	――――	〔釉色〕　白灰色。 〔施釉〕　外器面に施釉。
15	染付 (小杯) 肥前系 18C	復元口径　7.4cm 復元高台径　2.7cm 器厚　体部上位　3mm 中位　5mm 下位　6.5mm 底部　5.5mm	〔外器面〕 「大坂新町」の文字。	紅入れ。 高台の内側に焼成時の砂が付く。 〔呉須〕　青黒色。
16	染付 (小杯) 肥前系 18C	口径　6.2cm 高台径　2.3cm 器厚　体部上位　2.5mm 中位　3mm 下位　4mm 底部　4mm	〔外器面〕　線書文様。	被熱(二次的な熱を受けている)の染付。 〔呉須〕　青黒色。
17	染付 (小杯) 肥前系 18C	高台径　2.7cm 高台高　5mm 器厚　体部中位　3.5mm 下位　7mm 底部　11mm	〔外器面〕　文様。	内器面に焼成時の砂が付く。 〔施釉〕　高台の畳付き部分のみ無釉。
18	染付 (皿) 肥前系 18C中葉～末	器厚　体部上位　3mm 中位　5mm 下位　6mm 底部　6.5mm 高台高　5mm	〔内器面〕 2条の界線。五弁花文様。 〔外器面〕　4条の界線。 〔外底面〕　1条の界線。	〔呉須〕　青黒緑色。

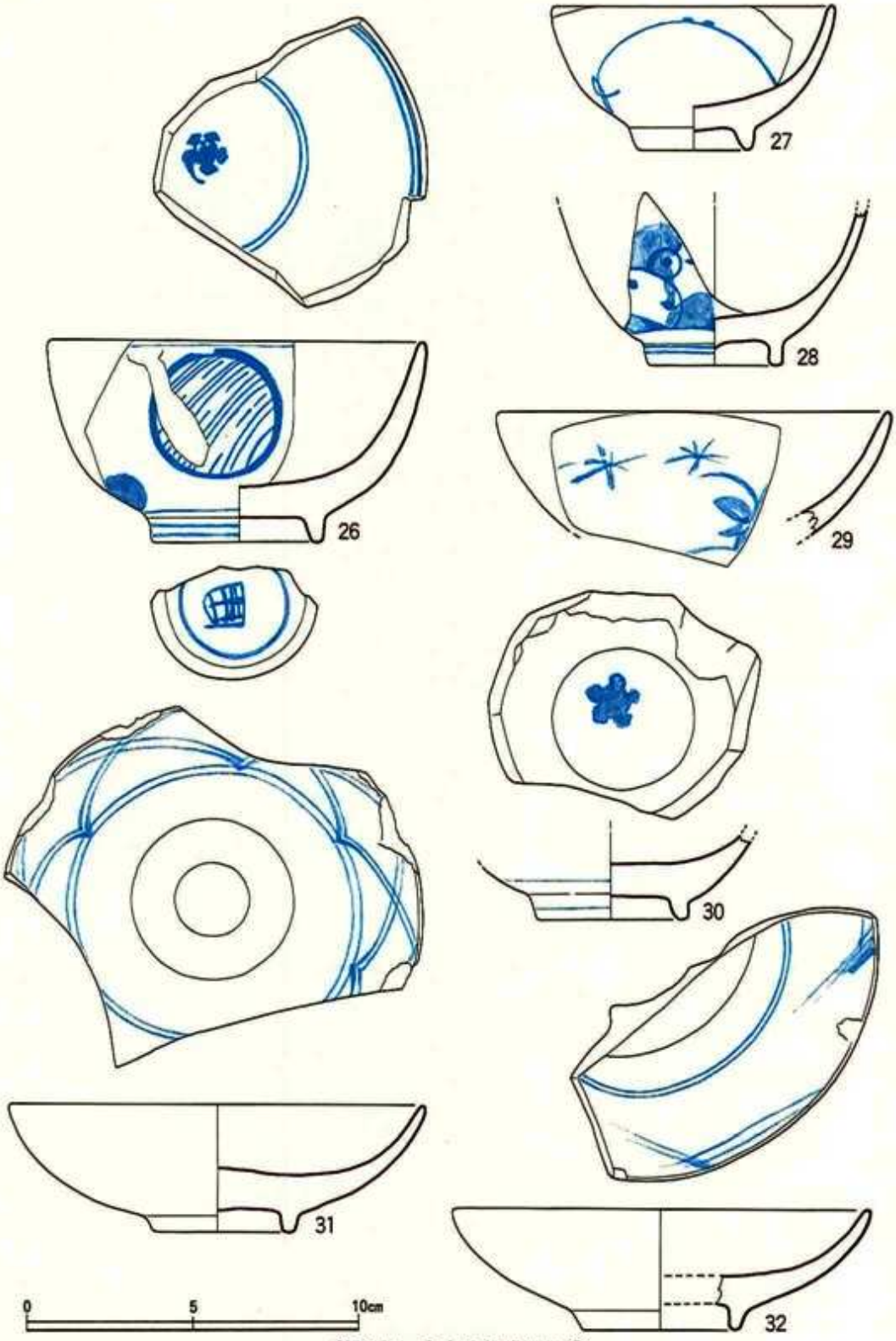
第2表　出土遺物観察表②



第12図　出土遺物実測図②

No.	器　種	形態の特徴	文様・手法・調整	備　　考
19	染付 (皿) 肥前系 18C中葉～末	復元口径 12.6cm 復元高台径 7.5cm 高台高 4mm 器厚 体部上位 4mm 中位 5～5.5mm 下位 7mm 底部 7mm	〔内器面〕 2条の界線。幾何学文様。 〔外器面〕 3条の界線。曲線文様。 〔外底面〕 1条の界線。	〔呉須〕 薄青灰色。
20	白磁 (碗) 肥前系 18C後半	復元口径 13cm 器厚 体部上位 3.5～4mm 中位 6mm 下位 7.5mm	――――	〔釉色〕 白灰色。
21	白磁(?) (碗) 肥前系 18C後半	高台径 4.4cm 器厚 底部中央 11mm 端部 9mm 体部下位 5.5mm	〔内器面〕 ロクロ痕。 〔外底面〕 中心部に若干の凸。	〔釉色〕 白灰色。 〔施釉〕 外器面は高台の畳付き部分のみ無釉。 内器面は中心部のみ施釉。 (直径3.2cmの円を描く)
22	染付 (碗) 肥前系 18C後半	器厚 体部上位 3mm 中位 4.5mm 下位 5.5mm	〔内器面〕 1条の界線。 〔外器面〕 1条の界線。丸文様。	〔呉須〕 青緑黒色。 〔胎土〕 灰色。
23	染付 (碗) 肥前系 18C後半	復元口径 11.9cm 器厚 体部上位 2mm 中位 4mm 下位 5mm	〔内器面〕 2条の界線。 〔外器面〕 丸文様。直径9mm。	〔呉須〕 薄青緑黒色。
24	染付 (碗) 肥前系 18C後半	復元口径 12.4cm 器厚 体部上位 5mm 中位 6mm 下位 7mm	〔内器面〕 2条の界線。 〔外器面〕 1条の界線。菱形文様。	〔呉須〕 薄青緑黒色。
25	染付 (碗) 肥前系 18C後半	復元口径 10.2cm 復元高台径 4.6cm 器厚 体部上位 4.5mm 中位 8mm 下位 9mm 底部 9mm 高台高 7.5mm	〔内器面〕 1条の界線。中心に文様。 〔外器面〕 4条の界線。変形・丸文様。	全体にくすんだ感じ。 〔呉須〕 薄灰黒色。
26	染付 (碗) 肥前系 18C後半	復元口径 11.5cm 復元高台径 5.3cm 器厚 体部上位 4mm 中位 7mm 下位 10mm 底部 10～11mm 高台高 7.5mm	〔内器面〕 4条の界線。中心部に五弁花文様。 〔外器面〕 4条の界線。大小の丸文様(大は直径4.4cm、小は直径1.4cm)。 〔外底面〕 1条の界線。中心部に方形文様。	外器面に貫入が入る。 〔呉須〕 薄青黒色。
27	染付 (碗) 肥前系 18C後半	復元口径 8.6cm 復元高台径 3.5cm 器厚 体部上位 3mm 中位 5mm 下位 8mm	〔外器面〕 曲線文様。	内器面に焼成時の砂が付く。 〔釉色〕 灰色。 〔呉須〕 薄灰黒色。 〔施釉〕 高台の畳付き部分のみ無釉。
28	染付 (碗) 肥前系 18C後半	復元高台径 4.1cm 器厚 体部上位 3mm 中位 3.5mm 下位 7mm 底部 8mm 高台高 7mm	〔外器面〕 3条の界線。文様。	〔呉須〕 青緑黒色。

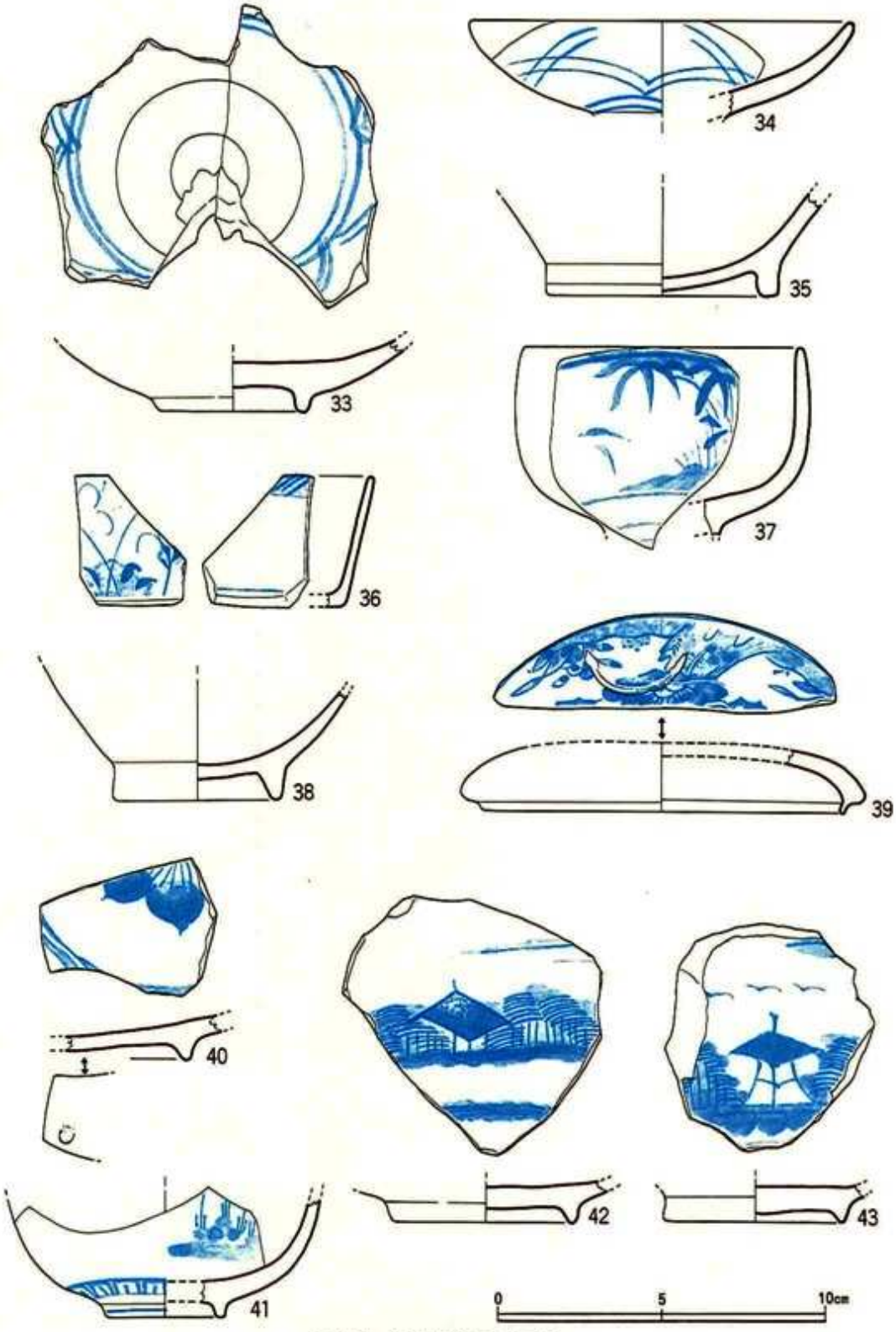
第3表　出土遺物観察表③



第13図　出土遺物実測図③

No.	器　種	形態の特徴	文様・手法・調整	備　考
29	染付 (碗) 肥前系 18C後半	復元口径　12cm 器厚　体部上位　3.5mm 中位　5mm 下位　7mm	〔内器面〕　1条の界線。 〔外器面〕 1条の界線。文様。	器面はくすんだ感じの灰白色。 〔呉須〕薄青黒色。
30	染付 (碗) 肥前系 18C後半	復元高台径　4.6cm 器厚　体部中位　4.5mm 下位　7.5mm 底部　10mm 高台高　7mm	〔内器面〕 中心部にコンニャク印判による五弁花文様。 蛇の目釉剥ぎが残る。 〔外器面〕　3条の界線。	〔呉須〕 内器面は青黒色。 外器面は薄青白色。
31	染付 (皿) 肥前系 18C後半	復元口径　12.6cm 高台径　4.3cm 高台高　6.5mm 器厚　体部上位　3mm 中位　4mm 下位　8mm 底部中央　13mm	〔内器面〕 蛇の目釉剥ぎが残る。 斜め格子文様。	〔呉須〕　薄青白色。
32	染付 (皿) 肥前系 18C後半	復元口径　12.7cm 復元高台径　4.8cm 高台高　8mm 器厚　体部上位　4mm 中位　5mm 下位　8mm 底部端部　9mm	〔内器面〕 蛇の目釉剥ぎが残る。 2条の界線。 斜め格子文様。	〔呉須〕　薄青緑色と緑青色。
33	染付 (皿) 肥前系 18C後半	高台径　4.6cm 高台高　7.5mm 器厚　体部中位　5mm 下位　9mm 底部　7.5mm	〔内器面〕 蛇の目釉剥ぎが残る。 2条の界線。 斜め格子文様。	内外器面に貫入が走る。 〔色調〕　白灰黄色。 〔呉須〕　青緑黒色。
34	染付 (皿) 肥前系 18C後半	復元口径　11.8cm 器厚　体部上位　4mm 中位　6mm 下位　6mm	〔内器面〕 蛇の目釉剥ぎが残る。 2条の界線。 斜め格子文様。	外器面に針穴状の小穴が目立つ。 〔呉須〕　青緑黒色。
35	白磁(?) (瓶) 肥前系 18C後半 ～19C中葉	内底面の中央部は凸。 復元高台径　7.1cm 器厚　体部中位　5mm 下位　7mm 底部　4mm	〔外器面〕　1条の界線。	内底面に焼成時の砂が付く。 〔色調〕　灰白色。
36	染付 (杯) 肥前系 1780～1810年代	湯呑み(?) 器厚　体部上位　2.5mm 中位　2.5mm 下位　3mm 底部　3.5mm	〔内器面〕 2条の界線間に格子文様。 体部の立上りに1条の界線。 〔外器面〕 2条の界線間に文様。	〔呉須〕　青緑黒色。
37	染付 (碗) 肥前系 1780～1810年代	湯呑み。 復元口径　8.7cm 器厚　体部上位　3.5mm 中位　5mm 下位　7mm	〔内器面〕　3条の界線。 〔外器面〕 3条の界線。笹葉文様。	〔呉須〕　青緑黒色。
38	白磁(?) (碗) 肥後系 1780～19C中葉	外器面の立ち上りに稜線。 復元高台径　5.6cm 高台高　9mm 器厚　体部中位　3mm 下位　5mm 底部　4mm	〔内器面〕 蛇の目釉剥ぎが残る。	〔色調〕　灰白色。 〔施釉〕　高台の畳付きのみ無釉。

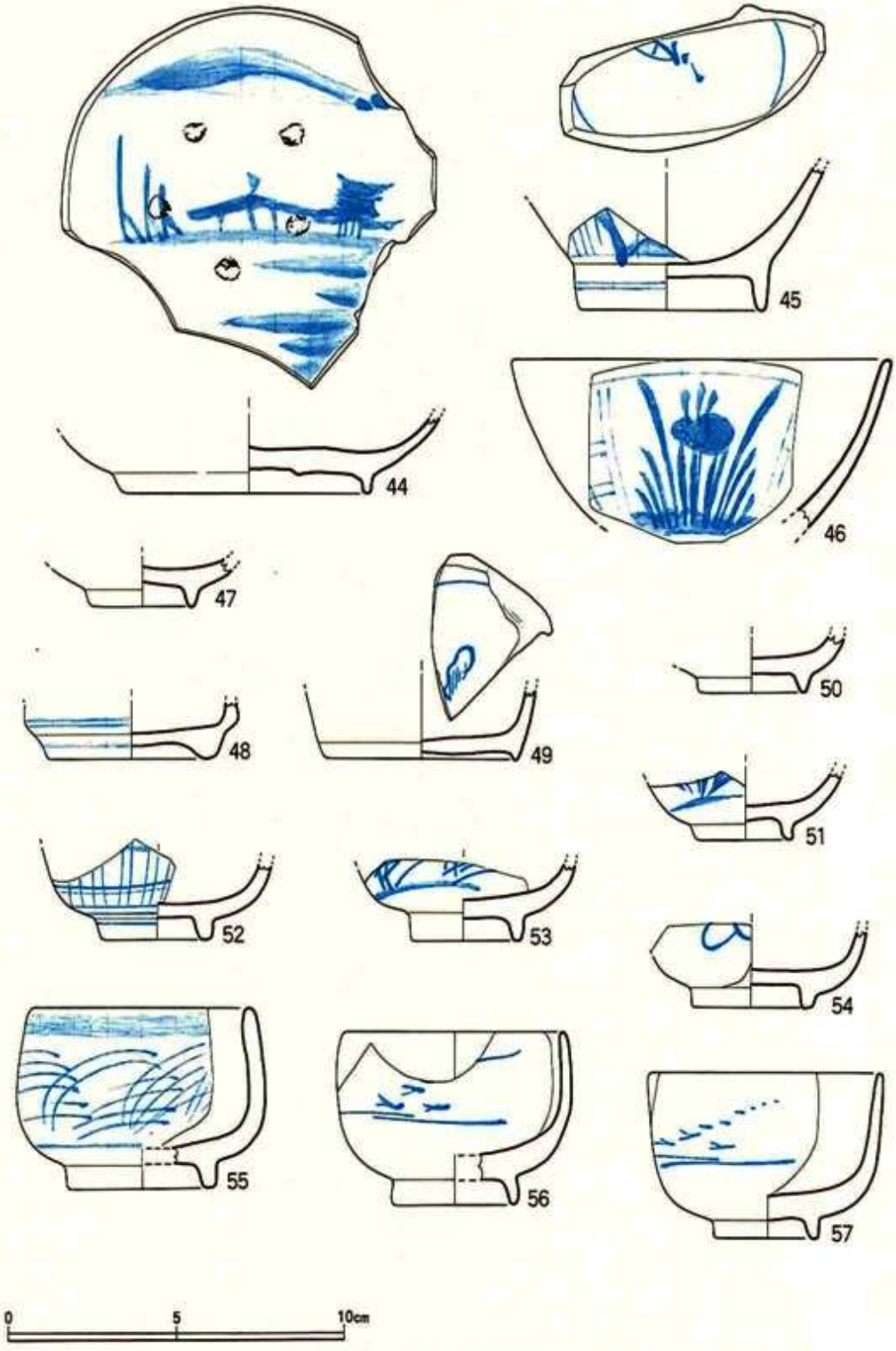
第4表　出土遺物観察表④



第14図　出土遺物実測図④

No.	器　種	形態の特徴	文様・手法・調整	備　考
39	染付 （蓋） 肥前系 18C末 ～19C中葉	蓋物。 復元高台径　11cm 高台高　3mm 器厚　体部中位　5mm 下位　7mm	〔外器面〕　風景絵。	〔呉須〕　青白色。
40	染付 （皿） 肥前系 18C末～ ～19C中葉	外底面に直径4mmのハリ支えの痕が残る。 高台高　4.5mm 器厚　体部下位　5.5mm 底部　5mm	〔内器面〕　文様。	内外器面に貫入が走る。 〔呉須〕　濃青色。
41	染付 （碗） 肥前系 19C初 ～1860年代	復元高台径　3.6cm 高台高　6mm 器厚　体部中位　4.5mm 下位　6.5mm 底部　6.5mm	〔内器面〕　1条の界線。 〔外器面〕　文様。	焼成不良。 〔色調〕　白黄色。 〔呉須〕　黒灰色。
42	染付 （皿） 肥前系 19C前半 ～1860年代	高台径　5.5cm 高台高　4mm 器厚　体部下位　5mm 底部中央　6.5mm	〔内器面〕　風景絵。	〔呉須〕　濃青黒色。
43	染付 （皿） 肥前系 19C前半 ～1860年代	高台径　5.6cm 高台高　4mm 器厚　体部下位　5mm 底部中央　8mm	〔内器面〕　風景絵。	内外器面に貫入が走る。 〔呉須〕　濃青黒色。
44	染付 （皿） 肥前系 19C前半 ～1860年代	蛇の目凹型高台。 型打ち整形。 高台径　7.4cm 高台高　6mm 器厚　体部中位　3mm 下位　5mm 底部中央　6mm 端部　7mm	〔内器面〕 風景絵。 足付きハマ痕が残る。	〔施釉〕　外底面の中心部は円形状に凹み（直径3cm）、施釉。その周辺の外底面はドーナツ状に無釉。
45	染付 （碗） 肥前系 19C前半	広東型。 復元高台径　5.6cm 高台高　10mm 器厚　体部中位　4mm 下位　7mm 底部　4.5mm	〔内器面〕 1条の界線。 中心部に線描き文様。 〔外器面〕 3条の界線。文様。	〔呉須〕青白色。
46	染付 （碗） 肥前系 19C前半	広東型 復元口径　11.4cm 器厚　体部上位　3.5mm 中位　3.5mm 下位　6mm	〔内器面〕　3条の界線。 〔外器面〕 1条の界線。草花文様。	〔呉須〕　薄青黒色。
47	白磁（?） 小杯（?） 肥前系 19C前半～中葉	復元高台径　3.2cm 高台高　6mm 器厚　体部下位　5mm 底部中央4.5mm	――	内外器面に貫入が走る。 〔色調〕　白黄色。
48	染付（?） （碗） 関西系（?） 19C前半～中葉	内底面に界線状の凹線。 復元高台径　4.9cm 高台高　5mm 器厚　体部下位　4.5mm 底部　3.5mm	〔外器面〕　3条の界線。	〔呉須〕　薄青色。

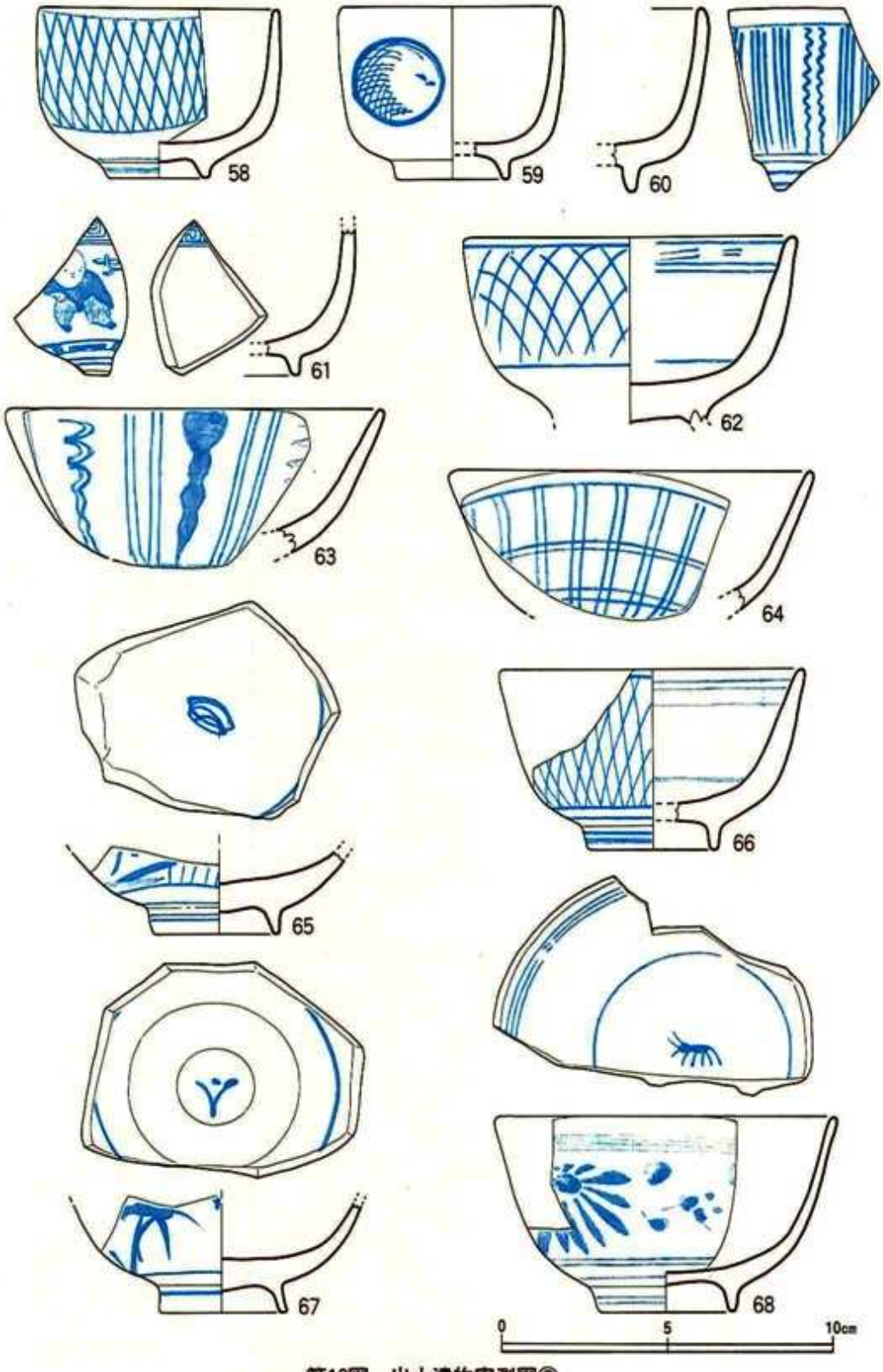
第5表　出土遺物観察表⑤



第15図　出土遺物実測図⑤

No.	器　種	形態の特徴	文様・手法・調整	備　考
49	染付 （猪口） 肥前系 19C前半～中葉	蛇の目凹型高台。 復元底径　5.8cm 高台高　1mm 器厚　体部下位　4mm 底部中央　3.5mm 端部　5mm	〔内器面〕 1条の界線。 中央部に文様。 〔外器面〕 2条の界線。	〔施釉〕蛇の目凹型高台の周辺は無釉。 〔呉須〕薄青黒色。
50	染付 （碗） 肥前系 1820～1860年代	湯呑み。 高台径　3.3cm 高台高　5.5mm 器厚　体部下位　5mm 底部中央　4.5mm	〔外器面〕 文様の痕跡あり。	〔呉須〕青色。
51	染付 （碗） 肥前系 1820～1860年代	湯呑み。高台径　2.9cm 高台高　5mm 器厚　体部下位　5mm 底部中央　4mm	〔外器面〕文様。	〔呉須〕薄青黒色。
52	染付 （碗） 肥前系 1820～1860年代	湯呑み。 復元高台径　3.3cm 高台高　7mm 器厚　体部下位　4.5mm 底部中央　4.5mm	〔外器面〕 3条の界線。格子文様。	〔呉須〕青灰色。
53	染付 （碗） 肥前系 1820～1860年代	湯呑み。 復元高台径　3.3cm 高台高　7mm 器厚　体部下位　5mm 底部中央　5.5mm	〔外器面〕 1条の界線。文様。	〔呉須〕灰オリーブ色。
54	染付 （碗） 肥前系 1820～1860年代	湯呑み。 復元高台径　3.6cm 高台高　7mm 器厚　体部下位　5mm 底部中央　4.5mm	〔外器面〕曲線文様。	〔呉須〕薄青灰色。
55	染付 （碗） 肥前系 1820～1860年代	湯呑み。 復元口径　6.7cm 復元高台径　4.4cm 高台高　7.5mm 器厚　体部上位　5mm 中位　5mm 下位　7mm 底部　6mm	〔外器面〕 界線間に線描き文様。 上位の界線は肉太で7mm幅。	〔色調〕灰白色。 〔呉須〕薄灰青黒色。
56	染付 （碗） 肥前系 1820～1860年代	湯呑み。 復元口径　6.7cm 復元高台径　3.7cm 高台高　7.5mm 器厚　体部上位　3mm 中位　3.5mm 下位　8mm 底部　8mm	〔外器面〕線描き文様。	〔色調〕白色。 〔呉須〕薄青黒色。
57	染付 （碗） 肥前系 1820～1860年代	湯呑み。 復元口径　7.1cm 復元高台径　3.2cm 高台高　5mm 器厚　体部上位　2.5mm 中位　3mm 下位　8mm 底部　7mm	〔外器面〕線描き文様。	〔色調〕白色。 〔呉須〕薄青白色。

第6表　出土遺物観察表⑥



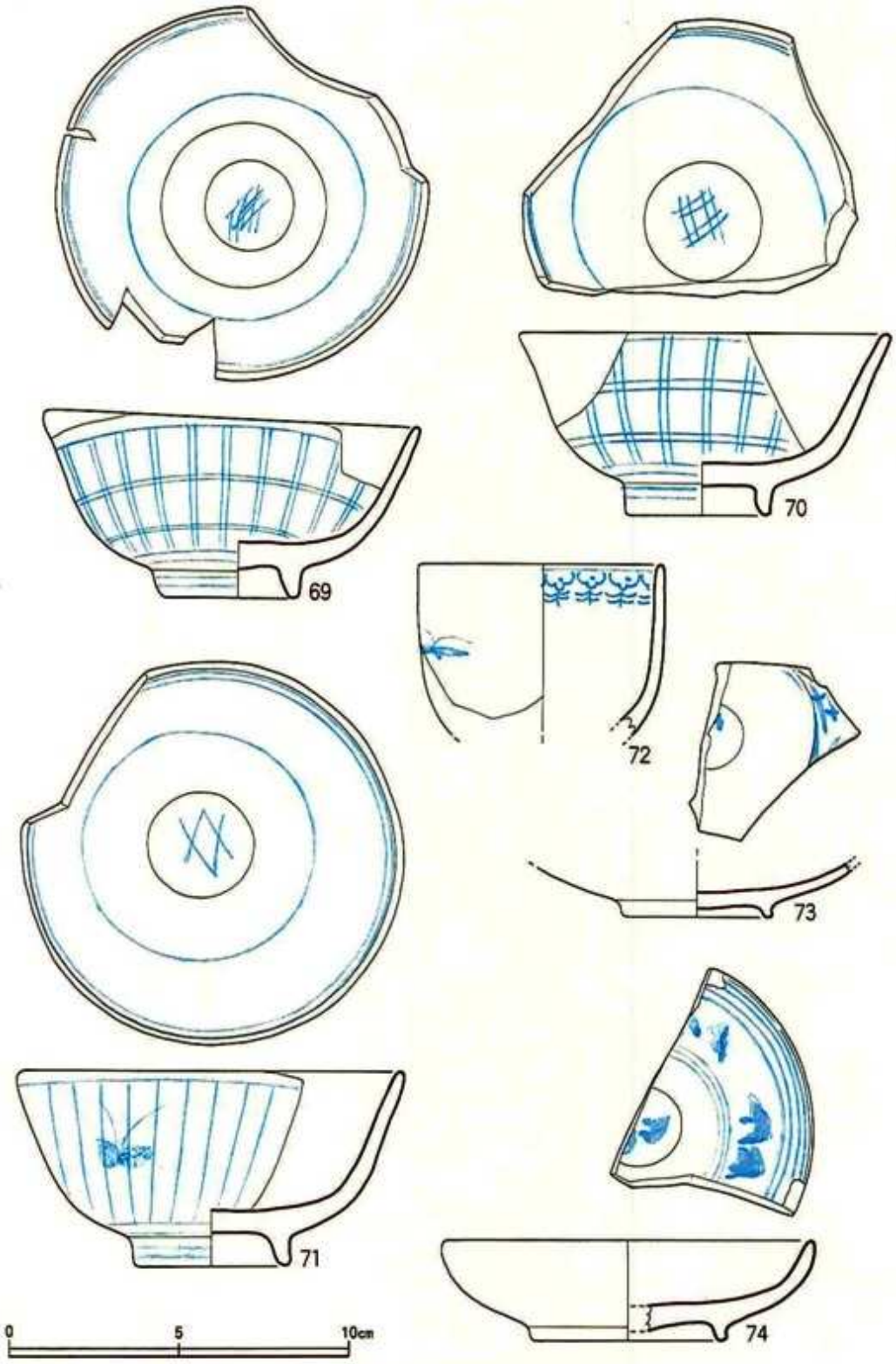
第16図　出土遺物実測図⑥

No.	器　種	形態の特徴	文様・手法・調整	備　　考
58	染付 （碗） 肥前系 1820～1860年代	湯呑み。 復元口径　7.4cm 復元高台径　3.1cm 高台高　5mm 器厚　体部上位　3mm 中位　4.5mm 下位　6mm 底部　6mm	〔外器面〕　線描き文様。	〔色調〕　白色。 〔呉須〕　薄青白色。
59	染付 （碗） 肥前系 1820～1860年代	湯呑み。 復元口径　6.5cm 復元高台径　3.5cm 高台高　6mm 器厚　体部上位　3mm 中位　4mm 下位　6mm 底部　4mm	〔外器面〕 直径2.7～2.9cmの丸文様。	〔色調〕　白灰黄色。 〔呉須〕　黒緑色。
60	染付 （碗） 肥前系 1820～1860年代	湯呑み。 高台高　8mm 器厚　体部上位　3.5mm 中位　4mm 下位　7mm	〔外器面〕 5条の界線。 2条の界線間に縦位の直線と曲線文様。	〔器面〕　灰色。 〔呉須〕　灰青色。
61	染付 （碗） 肥前系 1820～1860年代	湯呑み。高台高　6mm 器厚　体部上位　4.5mm 中位　6mm 下位　7.5mm	〔内器面〕　雷文。 〔外器面〕　人物絵。	〔器面〕　白色。 〔呉須〕　薄青黒色。
62	染付 （碗） 肥前系 1820～1860年代	端反り碗。 復元口径　10cm 器厚　体部上位　4mm 中位　7mm 下位　8mm 底部中央　12mm	〔内器面〕 4条の界線。中央部に文様。 〔外器面〕 4条の界線。2条の界線間に格子文様。	〔呉須〕　薄青黒色
63	染付 （碗） 肥前系 1820～1860年代	端反り碗。 復元口径　11.5cm 器厚　体部上位　4mm 中位　5mm 下位　7mm	〔内器面〕 3条の界線。 〔外器面〕 縦位の直線と曲線文様。	〔呉須〕 濃青黒色・薄青白色。
64	染付 （碗） 肥前系 1820～1860年代	端反り碗。 復元口径　11cm 器厚　体部上位　3.5mm 中位　4mm 下位　5mm	〔内器面〕　3条の界線。 〔外器面〕　太めの格子文様。	〔色調〕　灰白色。 〔呉須〕　青白色。
65	染付 （碗） 肥前系 1820～1860年代	端反り碗。高台径 3.8cm 高台高　8mm 器厚　体部中位　4.5mm 下位　8mm 底部中央　8.5mm	〔内器面〕 1条の界線。中心部に文様。 〔外器面〕 4条の界線。文様。	〔呉須〕　薄青白色。
66	染付 （碗） 肥前系 1820～1860年代	端反り碗。 復元口径　11.1cm 復元高台径　4cm 高台高　9mm 器厚　体部上位　3mm 中位　4mm 下位　5mm 底部中央　8mm	〔内器面〕 4条の界線。 〔外器面〕 5条の界線。2条の界線間に細目の縦長格子文様。	〔呉須〕 青白色・青緑白色。

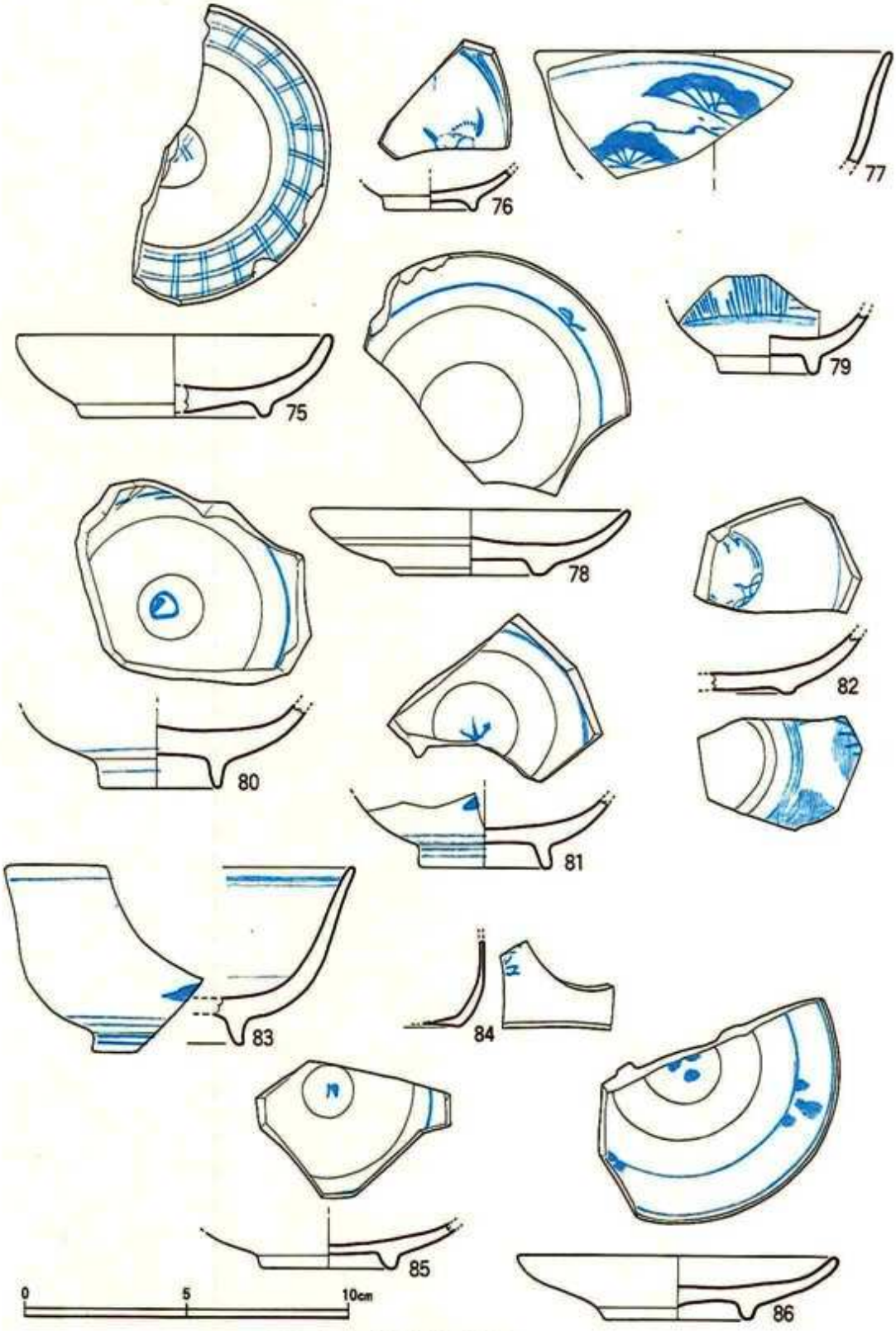
第7表　出土遺物観察表⑦

No.	器　種	形態の特徴	文様・手法・調整	備　　考
67	染付 （碗） 肥前系 1820～1860年代	端反り碗。 高台径　4.8cm 高台高　8mm 器厚　体部中位　3mm 下位　6.5mm 底部中央　9mm	〔内器面〕 1条の界線。 中心部に蛇の目釉剥ぎが残る。（1.2cm幅） 〔外器面〕 2条の界線。笹葉文様。	〔呉須〕 青緑色・濃青黒色。
68	染付 （碗） 肥前系 1820～1860年代	端反り碗。 復元口径　10.3cm 復元高台径　4.2cm 高台高　9mm 器厚　体部上位　3mm 中位　3mm 下位　5mm 底部中央　3mm	〔内器面〕 4条の界線。中央部に文様。 〔外器面〕 6条の界線。 2条の界線間に文様。	〔呉須〕　薄青黒色。
69	染付 （碗） 肥前系 1820～1860年代	端反り碗。 口径　11.1cm 高台径　4cm 高台高　9mm 器厚　体部上位　3mm 中位　4mm 下位　5mm 底部中央　8mm	〔内器面〕 3条の界線。蛇の目釉剥ぎが残る。中央部に文様。 〔外器面〕 9条の界線。方形状の格子文様。	〔色調〕　灰白色。 〔呉須〕　薄青灰緑色。
70	染付 （碗） 肥前系 1820～1860年代	端反り碗。 復元口径　10.9cm 高台径　4.3cm 高台高　9mm 器厚　体部上位　3.5mm 中位　5mm 下位　6mm 底部中央　7mm	〔内器面〕 3条の界線。蛇の目釉剥ぎが残る。中央部に文様。 〔外器面〕 9条の界線。方形状の格子文様。	〔色調〕　灰白色。 〔呉須〕　薄青灰緑色。
71	染付 （碗） 肥前系 1820～1860年代	端反り碗。 口径　11.3cm 高台径　4.6cm 高台高　10mm 器厚　体部上位　4mm 中位　5mm 下位　5mm 底部中央　7mm	〔内器面〕 3条の界線。蛇の目釉剥ぎが残る。中央部に文様。 〔外器面〕 5条の界線。2条の界線間に縦位の直線文様と蝶々文様。	〔色調〕　灰白色。 〔呉須〕　薄青灰緑色。
72	染付 （碗） 肥前系 1820～1860年代	復元口径　7.3cm 器厚　体部上位　3mm 中位　4mm 下位　5mm	〔内器面〕 1条の界線。 上位に幾何学文様。 〔外器面〕　昆虫文様。	〔呉須〕　青黒色。
73	染付 （皿） 肥前系 1820～1860年代	復元高台径　4.4cm 高台高　3mm 器厚　体部中位　3mm 底部中央　5mm	〔内器面〕 中心部と周辺部に文様。 蛇の目釉剥ぎが残る。	〔呉須〕　濃青黒色。
74	染付 （皿） 肥前系 1820～1860年代	復元口径　11cm 復元高台径　5.8cm 高台高　5mm 器厚　体部上位　4mm 中位　4mm 下位　6mm 底部　7mm	〔内器面〕 4条と3条の界線間に文様。 中心部に文様。 蛇の目釉剥ぎが残る。	〔呉須〕　青黒色。

第8表　出土遺物観察表⑧



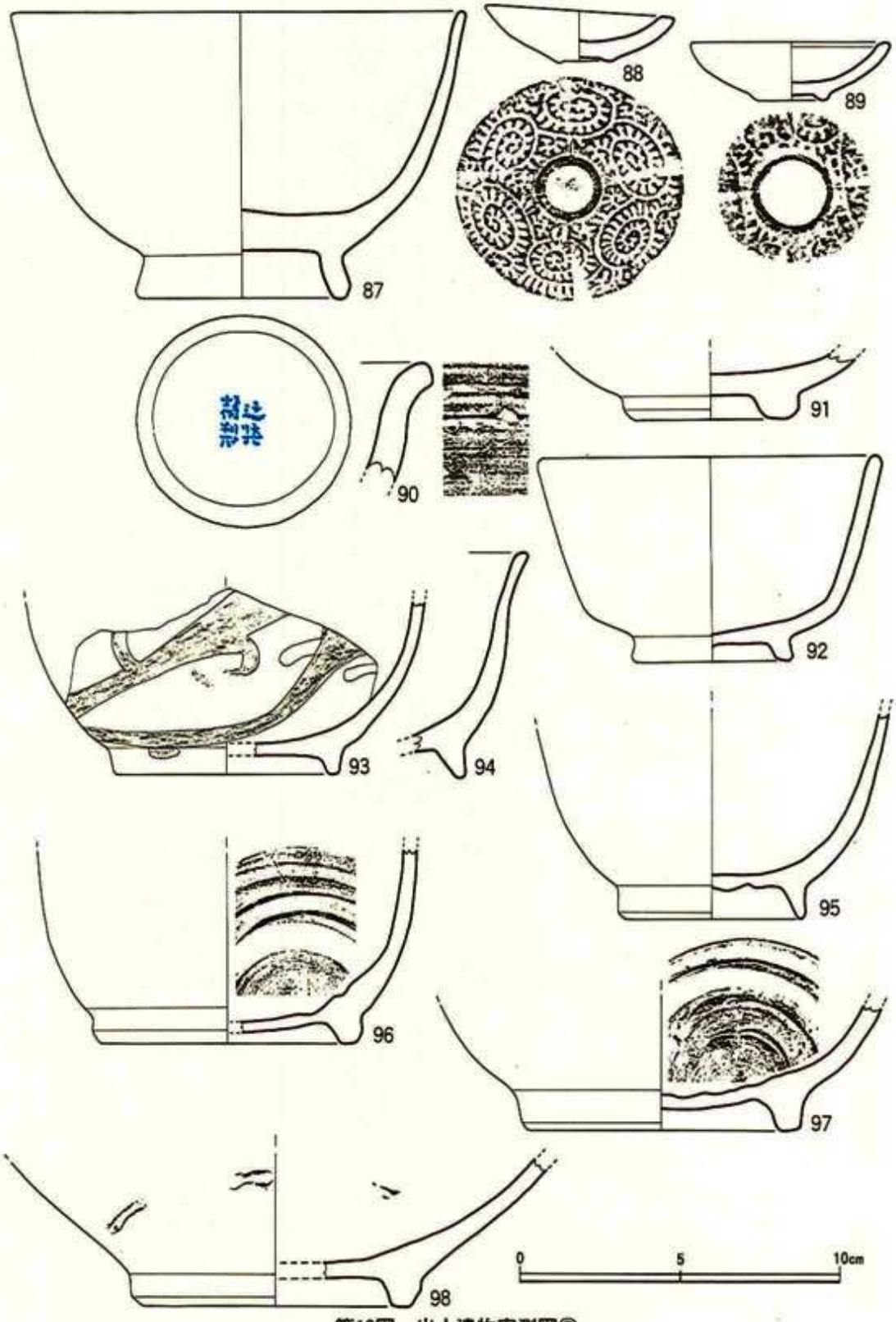
第17図　出土遺物実測図⑦



第18図　出土遺物実測図⑧

No.	器　種	形態の特徴	文様・手法・調整	備　考
75	染付 (皿) 肥前系 1820～1860年代	復元口径　9.5cm 復元高台径　5.3cm 高台高　5mm 器厚　体部上位　4mm 中位　5mm 下位　6mm 底部中央　8mm	〔内器面〕 方形状の格子文様。 中心部に線描き文様。 蛇の目釉剥ぎが残る。	〔呉須〕　薄緑色。
76	色絵 (小杯) 肥前系 1840～1860年代	復元高台径　3.8cm 高台高　2.5mm 器厚　体部下位　3mm 底部中央　3mm	〔内器面〕　文様。	〔絵の具〕　濃青色。
77	染付 (碗) 肥前系 19C中葉	端反り碗。 復元口径　11cm 器厚　体部上位　3mm 中位　4mm 下位　3.5mm	〔内器面〕　2条の界線。 〔外器面〕 1条の界線。扇状文様。	〔呉須〕　濃青黒色。
78	染付 (小皿) 肥前系 19C中葉～末	復元口径　10cm 復元高台径　4.6cm 高台高　5mm 器厚　体部上位　2.5mm 中位　4mm 下位　5mm 底部中央　7mm	〔内器面〕 1条の界線。小形文様。 蛇の目釉剥ぎが残る。	〔呉須〕　薄青白色。
79	染付 (碗) 肥前系 19C後半	湯呑み。 復元高台径　3.2cm 高台高　5mm 器厚　体部中位　3.5mm 下位　5mm 底部中央　6mm	〔外器面〕　直線文様。	〔色調〕　白黄色。 〔呉須〕　薄青黒色。
80	染付 (碗) 肥前系 19C後半	高台径　3.8cm 高台高　10mm 器厚　体部中位　4.5mm 下位　7mm 底部中央　9mm	〔内器面〕 1条の界線。 中心部に文様。 蛇の目釉剥ぎが残る。 〔外器面〕　2条の界線。	〔呉須〕　青白色。
81	染付 (碗) 肥前系 19C後半	復元高台径　4.2cm 高台高　7.5mm 器厚　体部中位　4mm 下位　6mm 底部中央　5mm	〔内器面〕 1条の界線。 中心部に文様。 蛇の目釉剥ぎが残る。 〔外器面〕　4条の界線。	〔呉須〕　薄青灰白色。
82	染付 (碗)　肥前系 19C後半	器厚　体部中位　4mm 下位　6mm 底部中央　5mm	〔内器面〕　松竹梅の文様。 〔外器面〕　文様。	〔色調〕　白黄色。 〔呉須〕 かすれた感じの薄青黒色。
83	染付 (碗) 肥前系 19C後半	高台高　9mm 器厚　体部上位　2.5mm 中位　4.5mm 下位　6.5mm 底部端部　6mm	〔内器面〕 3条の界線。 中心部に小形文様。 蛇の目釉剥ぎが残る。 〔外器面〕　5条の界線。文様。	〔呉須〕　青黒色。
84	染付 (急須?) 肥前系 19C後半	器厚　体部中位　1mm 下位　3mm 底部端部　2mm	〔外器面〕　文様。	〔色調〕　灰色。 〔呉須〕　青白色。 〔施釉〕　外器面のみ。
85	染付 (小皿) 肥前系 19C後半	復元高台径　4.2cm 高台高　5mm 器厚　体部下位　4mm 底部中央　3mm	〔内器面〕 1条の界線。 中心部に極小形文様。 蛇の目釉剥ぎが残る。	〔色調〕　内器面は白色。 外器面は白灰色。 (光沢あり) 〔呉須〕　青黒色。

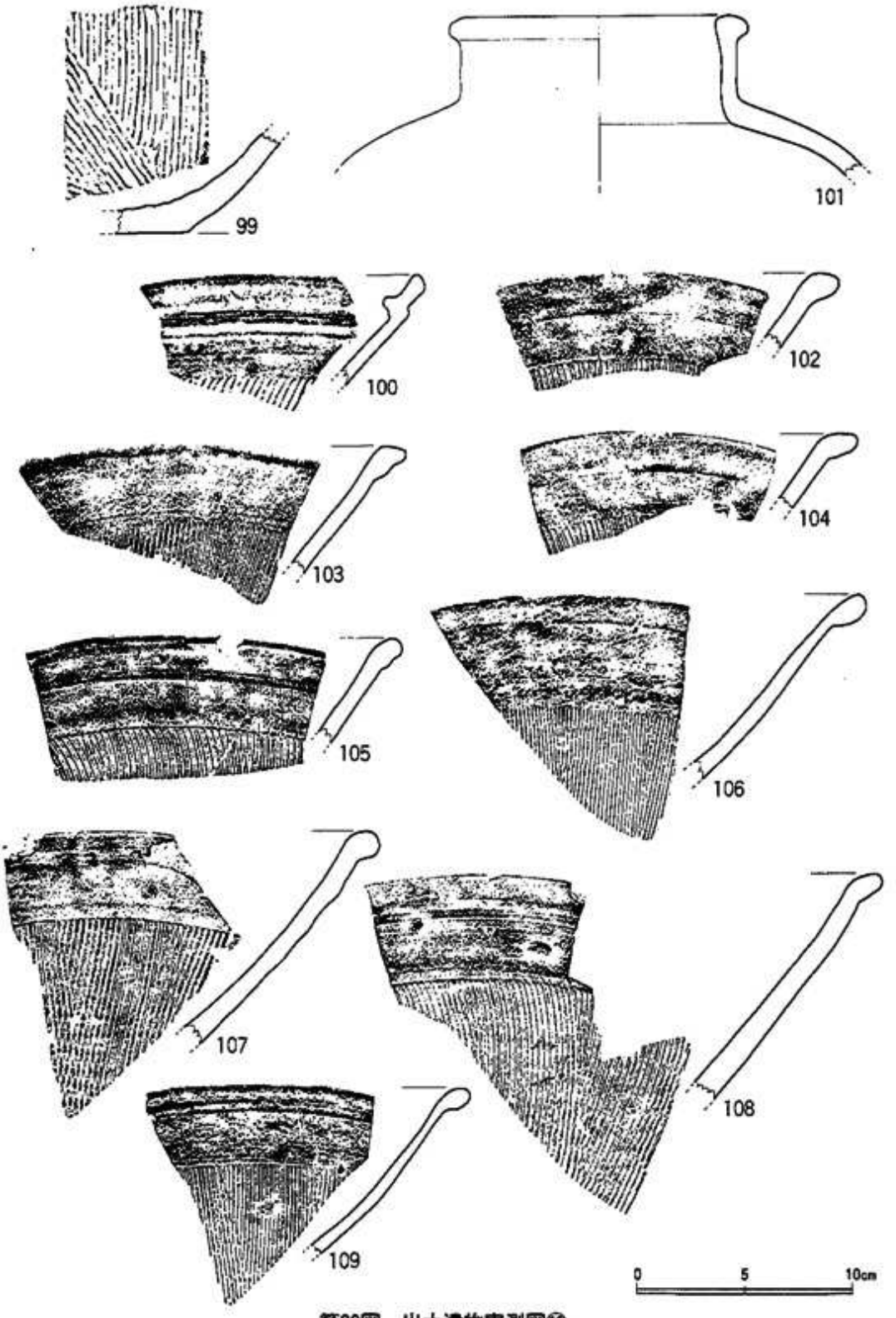
第9表　出土遺物観察表⑨



第19図　出土遺物実測図⑨

No.	器　種	形態の特徴	文様・手法・調整	備　考
86	染付 (小皿) 肥前系 19C後半	復元口径　10cm 復元高台径　4.8cm 高台高　5.5mm 器厚　体部上位　3mm 中位　3.5mm 下位　6mm 底部中央　6mm	〔内器面〕 2条の界線間に3点を一対とする小円文様。 中心部にも同様な文様。 蛇の目釉剥ぎが残る。	〔呉須〕　青黒色。
87	白磁 (鉢) 嬉野・吉田窯 明治～大正	口径　14.2cm 高台径　6.5cm 高台高　15mm 器厚　体部上位　3mm 中位　5mm 下位　8mm 底部中央　13mm 端部　11mm	〔外底面〕 型刷りによる「辻与精製」の文字。	朝鮮向けの輸出品。 〔呉須〕　青黒色。
88	白磁 (小皿)	口唇部は扁平(5mm幅)。 口径(6.1cm)に比べて、底部が著しく小さい(2.1cm)。 器厚　体部上位　5mm 下位　5mm 底部中央　5mm	〔内器面〕　丁寧なナデ。 〔外器面〕 器面一杯に型押し文様。	〔釉色〕　内器面：灰黄色。 外器面：白色。 〔施釉〕　内器面：全体。 外器面：口縁直下周辺。 〔素地〕　灰白橙色。
89	白磁 (小皿)	形状は88と同一。 口唇部は扁平(4mm幅)。 口径 6.4cm　底径 2.3cm 器厚　体部上位　4mm 下位　4mm 底部中央　4mm	調整は88と同一。	〔釉色〕　88と同一。 〔施釉〕　内器面：全体。 外器面：まだら状。
90	陶器	口縁部は外弯する。 器厚　口唇部　8mm 体部上位　9mm 中位　10mm	〔内器面〕　横ナデ。 〔外器面〕 上位は強い横ナデにより、7～10mm幅の凹線が生じている。下位は横ナデ。	〔色調〕　褐灰黄色。
91	陶器 肥前系 17C	高台の畳付きは幅広(7.5mm) 高台高　8mm 器厚　体部下位　6mm 底部中央　7mm	〔内器面〕　ナデ。	キセル使用の際に持ちいる火入である。 〔釉色〕　鉄釉。 〔施釉〕　内器面：無釉。 外器面：全体。
92	陶器 関西(京都系) 17C後半～18C	体部は丸味を帯びて立ち上り、その後直線的に伸びる。 復元口径　10.7cm 復元高台径　4.8cm 高台高　6mm 器厚　体部上位　5mm 中位　5mm 下位　4.5mm 底部中央　3mm	〔外器面〕 体部の立ち上がりに強い横ナデ。	〔釉色〕　黄褐色。 〔施釉〕　内器面：全体。 外器面：底部全面が無釉。
93	陶器 肥前系 18C	体部は丸味を帯びる。 復元高台径　7.1cm 高台高　6mm 器厚　体部中位　4mm 下位　6mm 底部中央　4mm	〔外器面〕 茶褐色釉による玉描き文様。	〔釉色〕　灰白黄色。 〔施釉〕　内器面：部分的。 外器面：高台畳付きを除き、全面に施釉。 〔素地〕　茶色。

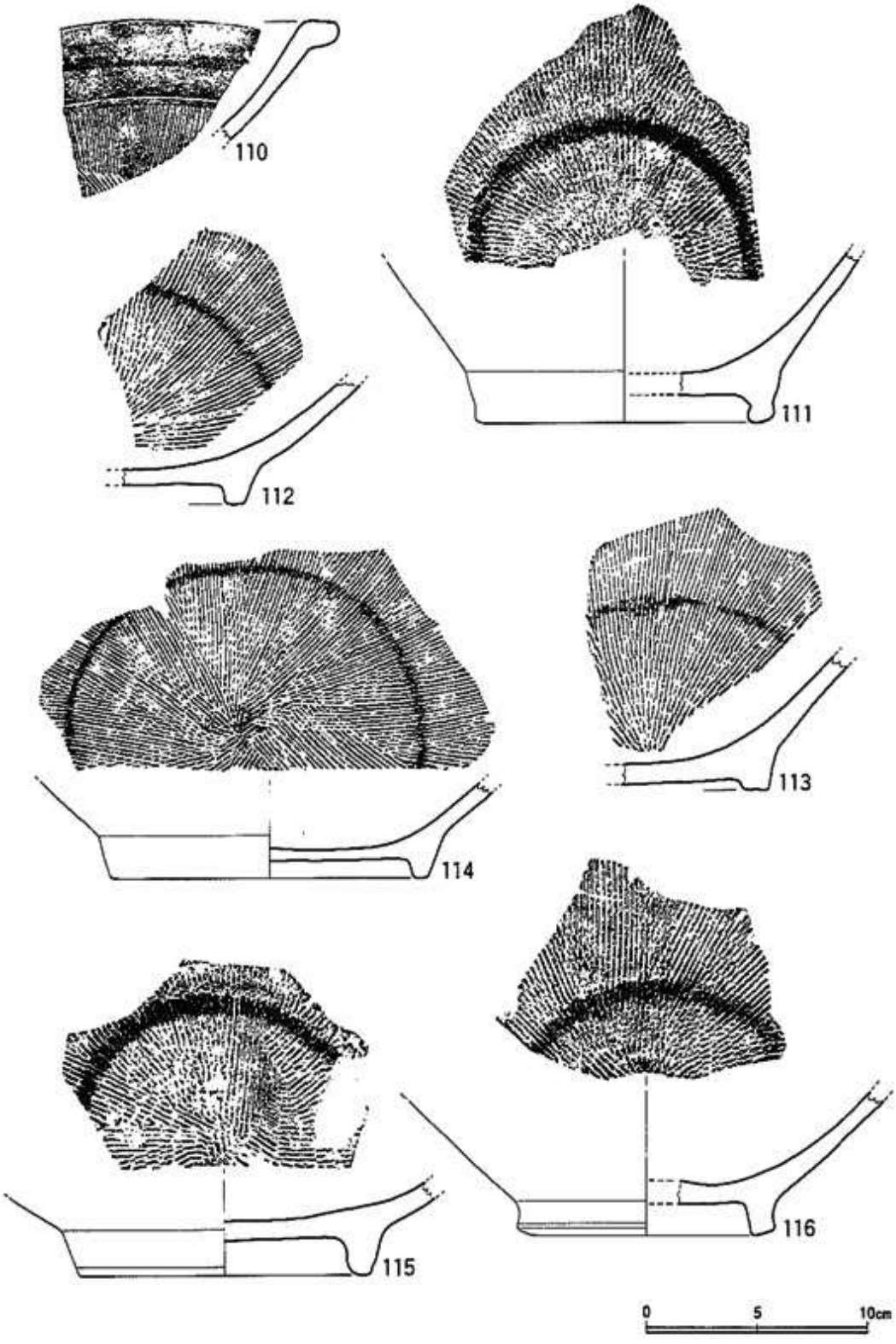
第10表　出土遺物観察表⑩



第20図　出土遺物実測図⑩

No.	器　種	形態の特徴	文様・手法・調整	備　　考
94	陶　器 小代系 18～19C	体部はやや丸味を帯びて、口縁部は若干の外弯。 器厚　口縁部　4mm 体部上位　3mm 中位　5mm 下位　7mm 底部端部　5.5mm	〔内外器面〕　藁灰釉流し。	〔釉色〕　鉄釉。 〔施釉〕　高台の外側から外底面にかけて無釉。
95	陶　器 小代系 18～19C	体部はやや丸味を帯びる。 復元高台径　5.5cm 高台高　10mm 器厚　体部上位　3mm 中位　5mm 下位　6mm 底部中央　4mm	――――	94と同じ。
96	陶　器 (瓶) 肥前系 18C後半～19C	体部はやや丸味を帯びる。 復元高台径　8cm 高台高　6mm 器厚　体部中位　4mm 下位　7mm 底部中央　3.5mm	〔内器面〕 釉下に強いロクロ回転痕。 凹線が生じている。 〔外器面〕 釉下に弱いロクロ回転痕。	〔釉色〕　白色。 〔施釉〕　内器面：無釉。 外器面：薄めに施釉。 〔素地〕　茶色。
97	陶　器 (瓶)	復元高台径　8.6cm 高台高　9mm 器厚　体部下位　6mm 底部中央　4mm	〔内器面〕 強いロクロ回転痕。 凹線が生じている。 内底面の中央に、指先による横ナデ。 〔外器面〕 釉下にやや弱いロクロ回転痕。	〔釉色〕　灰白色。 〔施釉〕　内器面：無釉。 外器面に施釉。 高台外側から外底面にかけて無釉。 〔素地〕　茶色。
98	陶　器 (鉢) 関西系 19C	復元高台径　8.5cm 高台高　9mm 器厚　体部中位　5mm 下位　10mm 底部　5mm	――――	窯詰め用の溶着痕が残る。 〔釉色〕　オリーブ色。 〔施釉〕 外器面殷下位から高台と外底面にかけて無釉。
99	陶　器 (擂鉢) 九州産 17C中～18C初	平底で、体部の立ち上がりに稜がつく。 器厚　体部下位　11.5mm 底部中央　11mm	〔内器面〕 器面一杯に条線が掻かれている。一定の単位を持った条線が交差する。	〔色調〕　小豆色。
100	陶　器 (擂鉢) 九州産 17C中～18C初	内器面の上位に返りが付く 器厚　口唇部　8mm 体部上位　13.5mm 中位　6mm	〔内器面〕 器面一杯に条線が掻かれている。	〔色調〕　小豆色。
101	陶　器 (壺) 九州産 17C後半～18C	頸部は直立する。 器厚　口縁部　15mm 頸部　7mm 肩部　9mm	〔内器面〕　強い横ナデ。 〔外器面〕　丁寧なナデ。	〔色調〕　小豆色。 〔胎土〕　精良。
102	陶　器 (擂鉢)	口縁部は大きく外弯する。 器厚　口縁部　12mm 体部上位　10mm	〔内器面〕 殷上位は横ナデ。条線が器面一杯に掻かれている。 〔外器面〕　丁寧な横ナデ。	〔色調〕　小豆色。 〔胎土〕　精良。
103	陶　器 (擂鉢)	口縁部はやや外弯する。 口唇部は扁平(9.5mm幅)。 器厚　口縁部　10mm 体部上位　7.5mm	〔内器面〕 殷上位は横ナデ。条線が器面一杯に掻かれている。 〔外器面〕　やや強い横ナデ。	外器面に無釉の箇所がある。 〔色調〕　まだら状の小豆色。 〔胎土〕　精良。

第11表　出土遺物観察表⑪



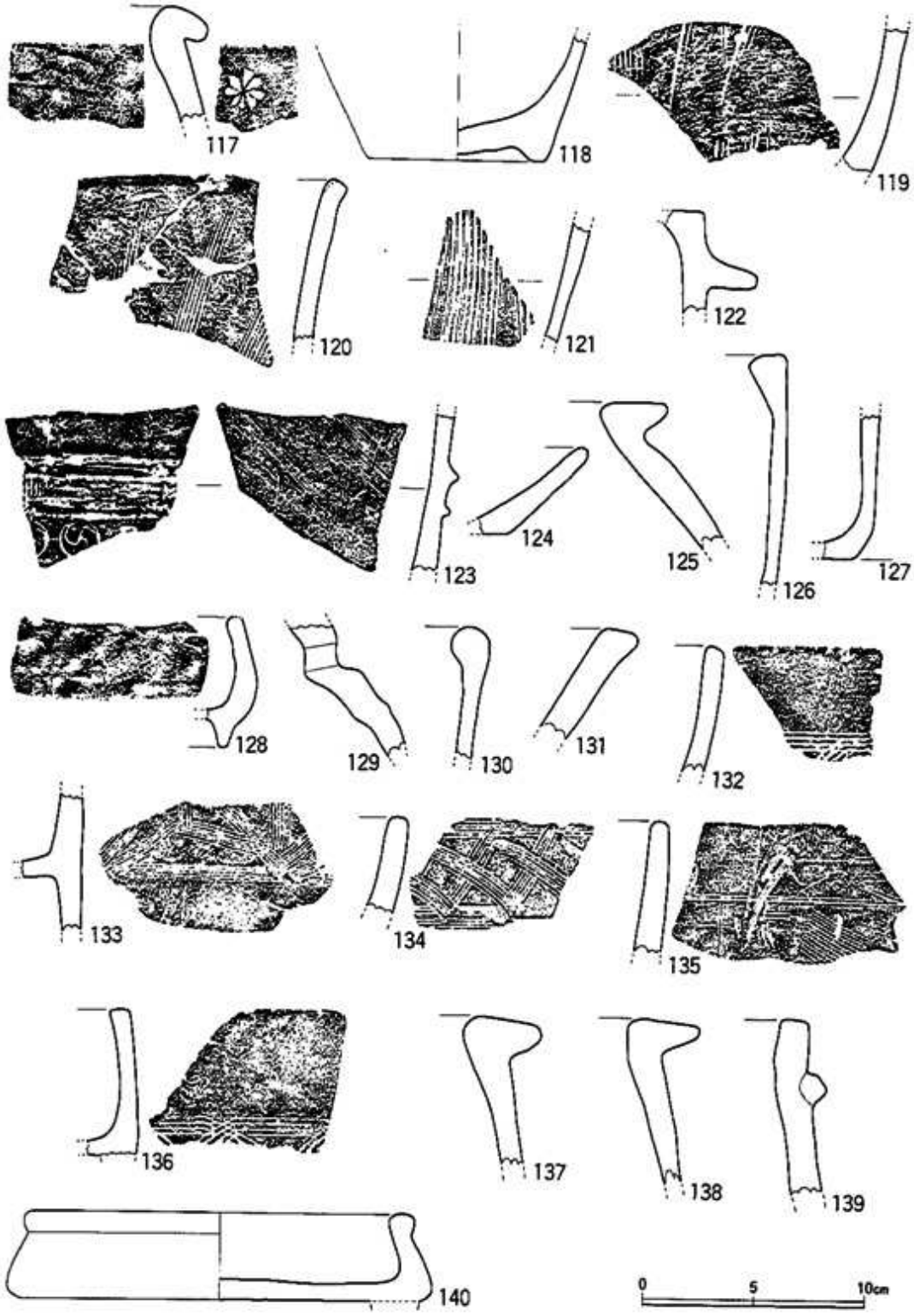
第21図　出土遺物実測図⑪

No.	器　種	形態の特徴	文様・手法・調整	備　　考
104	陶　器 （擂鉢）	口縁部は外弯。 器厚　口縁部　11mm 体部上位　7.5mm	〔内器面〕 最上位は横ナデ。条線が器面一杯に掻かれている。 〔外器面〕 比較的強い横ナデにより、弱い沈線が生じている。	〔色調〕　小豆色。 〔胎土〕　精良。
105	陶　器 （擂鉢）	口縁部はやや外弯する。 器厚　口縁部　10mm 体部上位　7mm	〔内器面〕 最上位は強い横ナデにより2.4cm幅の沈線が生じている。条線が器面一杯に掻かれている。 〔外器面〕 最上位は非常に強い横ナデにより5mm幅の条線が生じている。器面一杯に横ナデ。	〔色調〕　小豆色。
106	陶　器 （擂鉢） 九州産 18C後半～19C	口縁部は外弯しながら、玉縁状に肥厚する。 器厚　口縁部　11mm 体部上位　7mm 中位　8mm	〔内器面〕 上位から中位にかけて丁寧な横ナデ。 器面一杯に細かな条線が密に掻かれている。 〔外器面〕　丁寧なナデ。	黄色の自然釉がかかる。 〔色調〕　小豆色。
107	陶　器 （擂鉢） 九州産 18C後半～19C	口縁部は外弯する。 器厚　口縁部　12mm 体部上位　10mm 中位　10mm	〔内器面〕 最上位は極めて丁寧な横ナデ。器面一杯に条線が掻かれている。一定の単位を持った条線が交差する。 〔外器面〕 ナデ。最上位は強い横ナデにより3mm幅の沈線が生じている。	〔色調〕　小豆色。
108	陶　器 （擂鉢）	口縁部は外弯する。 器厚　口縁部　10mm 体部上位　10mm 中位　12mm	〔内器面〕 最上位は非常に丁寧な横ナデ。器面一杯に条線が掻かれている。 〔外器面〕 やや強い横ナデ。最上位は強い横ナデにより5mm幅の沈線が生じている。	〔色調〕　黄小豆色。
109	陶　器 （擂鉢） 九州産	器面は薄壁で、口縁部は大きく外弯する。 器厚　口縁部　9mm 体部上位　3.5mm 中位　6mm	〔内器面〕 器面一杯に細目の条線が掻かれている。最上位はその後、横ナデが施されている。 〔外器面〕　丁寧なナデ。	〔色調〕　小豆色。
110	陶　器 （擂鉢）	口縁部は外弯する。 口唇部は扁平（10mm幅）。 器厚　口縁部　11mm 体部上位　7mm	〔内器面〕 最上位は丁寧な横ナデ。器面一杯に条線が掻かれている。一定の単位を持った条線が交差する。 〔外器面〕　丁寧なナデ。	〔色調〕　小豆色。
111	陶　器 （擂鉢） 九州産（肥前系？） 18～19C	復元底径　13.2cm 高台高　1.3cm 器厚　体部中位　7mm 下位　11mm 底部　11mm	〔内器面〕 器面一杯に条線が掻かれている。 〔外器面〕ナデ。	内底面を中心に高台の外側と外底面に焼成時の砂が付着。 〔色調〕　オリーブ色。

第12表　出土遺物観察表⑫

No.	器　種	形態の特徴	文様・手法・調整	備　　考
112	陶器 (擂鉢)	器厚　体部中位　8mm 下位　9mm 底部中央　7mm 端部　11mm 高台高　9mm	〔内器面〕 器面一杯に条線が掻かれている。 〔外器面〕　ナデ。	内底面を中心に高台の外側と外底面に焼成時の砂が付着。 〔色調〕　オリーブ色。
113	陶器 (擂鉢)	高台畳付は扁平(1.1cm幅)。 高台高　5mm。 器厚　体部中位　8mm 下位　12mm 底部中央　9mm 端部　14.5mm	〔内器面〕 器面一杯に条線が掻かれている。 〔外器面〕　ナデ。	内底面に焼成時の砂が付着。 〔色調〕　灰黒小豆色。
114	陶器 (擂鉢) 九州産 18C後半～19C	底部は中央が凸。 復元底径　14.3cm 高台高　9mm 器厚　体部下位　8mm 底部中央　6mm	〔内器面〕 器面一杯に条線が掻かれている。 〔外器面〕　ナデ。	内底面に焼成時の砂が付着。 〔色調〕　灰小豆色。
115	陶器 (擂鉢) 九州産 18C後半～19C	復元底径　13cm 高台高　1.7cm 器厚　体部下位　11mm 底部中央　9mm	〔内器面〕 器面一杯に条線が掻かれている。 〔外器面〕　ナデ。	内底面に焼成時の砂がベットリと付着。 〔色調〕　小豆色。
116	陶器 (擂鉢)	復元底径　10cm 高台高　1.5cm 器厚　体部中位　6.5mm 下位　8mm 底部中央　10mm	〔内器面〕 器面一杯に条線が掻かれている。 〔外器面〕　ナデ。	内底面と高台の外側から外底面にかけて焼成時の砂が付着。
117	陶器 (壺)	口縁部は大きく折り返されている。 器厚　口縁部　2.1cm 体部上位　1.2cm	〔内器面〕 ナデ後、強い指押えが残る。 〔外器面〕 ナデ。花弁のスタンプ。	〔色調〕　灰茶色。
118	陶器 (壺)	復元底径　8cm 器厚　体部中位　6mm 下位　11mm 底部中央　11mm	〔内器面〕　ナデ。 〔外底面〕　強い指押え。	〔色調〕　灰黒茶色。 底部の畳付きはレンガ色。
119	瓦質土器 (擂鉢)	器厚　上位　10mm 中位　10.5mm 下位　14mm	〔内器面〕 ローリングが激しいが、条線の一単位は9本と推定される。 〔外器面〕　指押え。	〔色調〕　灰色。 〔焼成〕　堅緻。 〔胎土〕　精良。
120	土師質土器 (擂鉢) 中世	口唇部は扁平(9.5mm幅)で、中央部がやや凹む。 体部は上位にかけて漸次、肥厚。 器厚　口縁部　11mm 体部上位　9mm	〔内器面〕 斜めの掻き目後、7本を一単位とする条線。 〔外器面〕 ナデ後、指押え。	二次焼成の可能性有り。 〔色調〕　桃灰白色。 〔焼成〕　堅緻。 〔胎土〕　精良。
121	瓦質土器 (擂鉢) 中世	器厚　上位　8mm 中位　6mm 下位　6mm	〔内器面〕 斜めの掻き目後、9本を一単位とする条線。 〔外器面〕 丁寧なナデ後、指押え。	〔色調〕　灰色。 〔焼成〕　非常に堅緻。 〔胎土〕　精良。
122	瓦質土器 (ハガマ)	鍔はシャープな造り。 器厚　上位　12mm 鍔　9mm 下位　10mm	〔内器面〕 横ナデ後、指押えが目立つ。 〔外器面〕　丁寧なナデ。	〔色調〕　灰白色。 〔焼成〕　非常に堅緻。 〔胎土〕　精良。

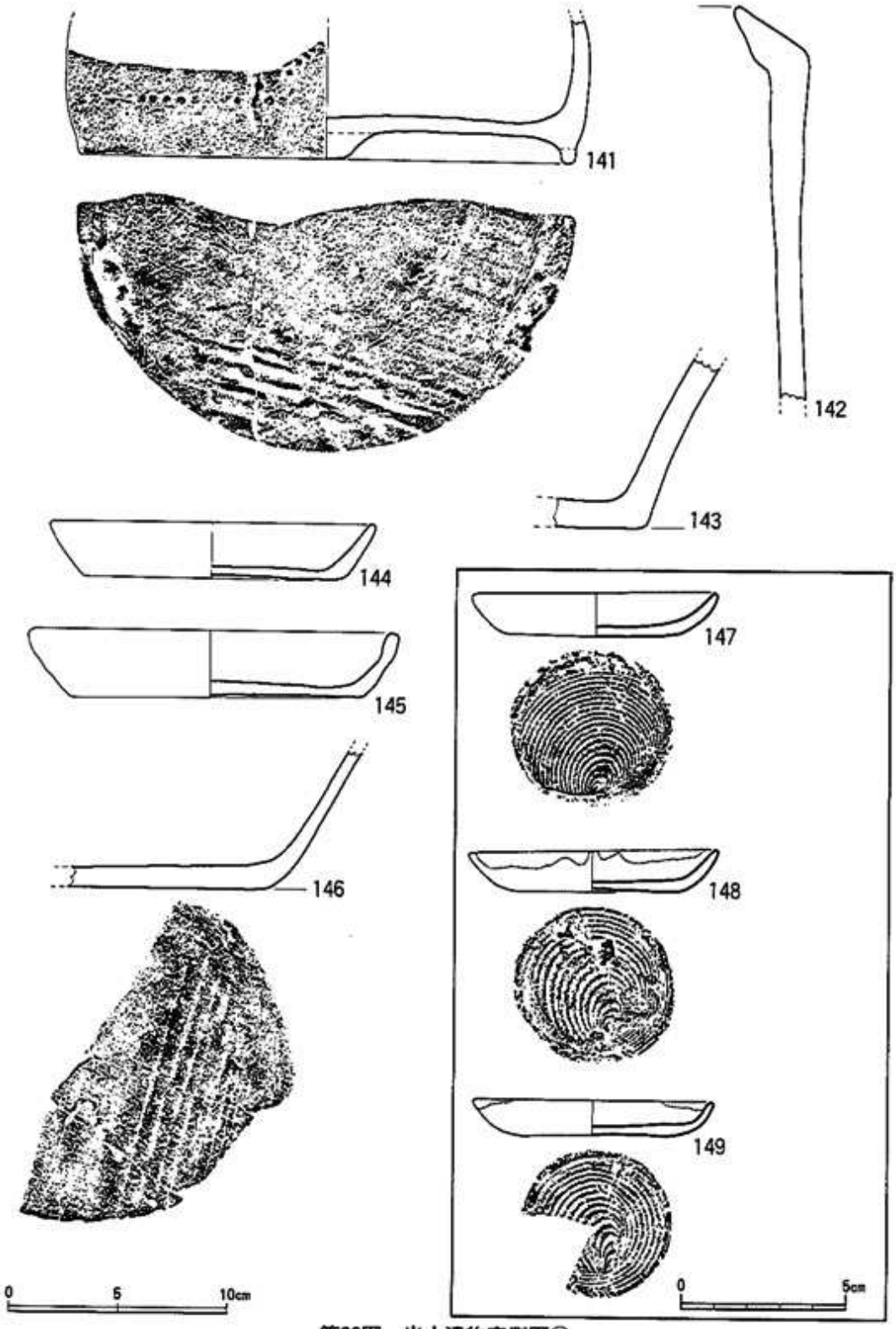
第13表　出土遺物観察表⑬



第22図　出土遺物実測図⑫

No.	器　種	形態の特徴	文様・手法・調整	備　　考
123	瓦質土器 （火舎） 中世	胴に2条の突帯。 器厚　上位　7.5mm 突帯部　12mm 突帯間　8mm 下位　10.5mm	〔内器面〕 ハケ目、指押え。 〔外器面〕 横ナデ。突帯間に格子文様。 下位に雷文スタンプ。	〔色調〕　内器面：灰褐色。 外器面：灰色。 〔焼成〕　普通。 〔胎土〕　精良。
124	土師系土器 （杯）	体部は肉太で、やや内弯。 器厚　体部上位　9mm 中位　9mm 下位　12mm	〔内外器面〕　横ナデ。 〔外器面〕　指押え。	〔色調〕 内器面：ススにより黒色。 外器面：鈍い橙色と黒色。 〔焼成〕　非常に堅緻。 〔胎土〕　精良。
125	瓦質土器 （雑器）	口縁部は折り返されて扁平（2.4cm幅）。 器厚　口縁部　30mm 体部上位　12mm 中位　11mm	〔内外器面〕 ローリングが激しい。整形は粗い。	外器面にスス付着。 〔色調〕　薄橙白色。 〔焼成〕　非常に堅緻。 〔胎土〕　精良。
126	瓦質土器 （雑器）	体部は上位にかけて漸次、肥厚する。 内器面は上位で内傾する。 口唇部は扁平。 器厚　口縁部　17mm 体部上位　6mm 下位　7mm	〔内器面〕　横ナデ。指押え。 〔外器面〕　横ナデ。	〔色調〕　内器面：灰白褐色。 外器面：黒色。 〔焼成〕　普通。 〔胎土〕　精良。
127	瓦質土器 （雑器）	外底端は丸味を帯びる。 器厚　体部中位　8.5mm 下位　6.5mm 底部端部　7mm	〔内器面〕　横ナデ。指押え。 〔外器面〕　横ナデ。	〔色調〕　内器面：灰褐色。 外器面：黒色。 〔焼成〕　普通。 〔胎土〕　精良。
128	土師系土器 （雑器）	体部は丸味を帯びて上位で内傾する。 脚が付く。 器厚　体部中位　5.5mm 下位　9mm 底部　7mm	〔内器面〕 横ナデ。強い指押え。 〔外器面〕 丁寧な横ナデ。指押え。	〔色調〕　灰褐色。 〔焼成〕　普通。 〔胎土〕　精良。
129	土師系土器 （雑器）	胴部に円孔が付く。 器厚　上位　16mm 中位　15mm 下位　10mm	〔内器面〕 粗く強い横ナデ。 〔外器面〕 非常に粗く強い横ナデ。	〔色調〕　内器面：灰黒色。 外器面：灰褐色。
130	土師系土器	口縁部は内傾し肥厚する。 器厚　口縁部　18mm 体部上位　8mm	〔内器面〕 ナデ後、強い指押え。 〔外器面〕 丁寧なナデ。口唇部の外側は強い横ナデ。	内器面にススが付着。 〔色調〕　褐灰色。 〔焼成〕　堅緻。 〔胎土〕　精良。
131	土師系土器	口唇部は扁平（1.5cm幅）で、外傾する。 器厚　口縁部　18mm 体部上位　14mm	〔内器面〕　丁寧な横ナデ。 〔外器面〕 横ナデ。特に上位は強い横ナデにより凹線状を呈する。	〔色調〕　鈍い橙色。 〔焼成〕　非常に堅緻。 〔胎土〕　鉱物と白色粒が混入。
132	土師系土器	口唇部は扁平（6mm幅）で、外傾する。 器厚　口縁部　10mm 体部上位　9mm	〔内器面〕 ナデ後、強い指押え。 〔外器面〕 丁寧なナデ。下位に横位と斜めの直線的な沈線。	〔色調〕　灰黄褐色。 〔焼成〕　非常に堅緻。 〔胎土〕　白色粒の混入。
133	土師系土器	高台が付く。 器厚　底部中央寄　8mm 端部　7mm	〔内器面〕 ナデ後、強い指押え。	〔色調〕　褐灰色。黒色。 〔焼成〕　普通。 〔胎土〕　白色粒を混入する。

第14表　出土遺物観察表⑭



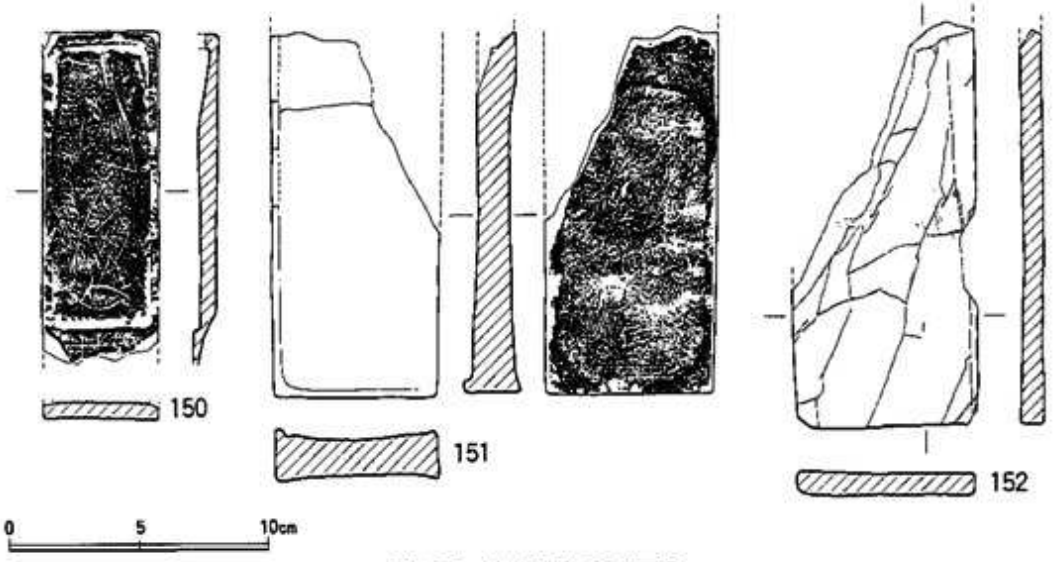
第23図　出土遺物実測図⑬

No.	器　種	形態の特徴	文様・手法・調整	備　　考
134	土師系土器	器厚　口縁部　10mm 体部上位　11mm	〔内器面〕　ナデ後、指押え。 〔外器面〕 沈線の組合せで、菱形が形成されている。	内器面にススが付着。 〔色調〕　灰黄褐色。 〔焼成〕　普通。 〔胎土〕　白色粒が混入。
135	土師系土器	器厚　口縁部　9mm 体部上位　10mm	〔内器面〕 横ナデ後、指押え。 〔外器面〕 横位の直線状の沈線。 斜め短直線状の沈線。	内外器面ともススが付着。 〔焼成〕　堅緻。 〔胎土〕　精良。
136	土師系土器	器厚　口縁部　9mm 体部上位　7mm 下位　10mm	〔内器面〕 横ナデ後、指押え。 〔外器面〕　ナデ。 横位の直線状の沈線。左右から交差するX形状の沈線。	〔色調〕　褐灰色。 〔焼成〕　堅緻。 〔胎土〕　精良。
137	土師系土器	口縁部は大きく折り返されている。 器厚　口縁部　35mm 体部上位　10mm	〔内外器面〕　ナデ。	〔色調〕　褐灰白色。 〔焼成〕　堅緻。 〔胎土〕 白色粒の混入が目立つ。
138	土師系土器	口縁部は大きく折り返されて外傾する。 器厚　口縁部　32mm 体部上位　11mm 中位　8mm	〔内器面〕　ナデ後、指押え。 〔外器面〕　横ナデ。	〔色調〕　褐白色。 〔焼成〕　非常に堅緻。 〔胎土〕　鉱物の混入が目立つ。
139	土師系土器	口縁部の下に粗い貼り付け突帯が付く。 器厚　口縁部　13.5mm 突帯部　23mm 体部中位　14mm	〔内器面〕 横ナデ後、指押え。 〔外器面〕　横ナデ。	器面にススが付着。 〔色調〕　褐白桃色。 〔焼成〕　非常に堅緻。 〔胎土〕　精良。
140	瓦質土器	脚(三足)が付く。 復元口径　17.5cm 復元底径　18cm 器厚　口縁部　11.5mm 体部中位　9.5mm 底部中央　9mm	〔内底面〕　ナデ。 〔外底面〕　丁寧なナデ。	〔色調〕　灰白色。 〔焼成〕　普通。 〔胎土〕　精良。
141	土師系土器	脚(三足)が付く(高さ1.3cm) 内底面中央は全体的に凸。 器壁は薄壁。 復元底径　22.7cm 器厚　体部中位　6.5mm 下位　10mm 底部中央　5.5mm	〔内底面〕　ナデ後、指押え。 〔外底面〕 ナデ後、強い指押え。 板状圧痕あり。	〔色調〕　褐灰色。 〔焼成〕　普通。 〔胎土〕　精良。
142	土師系土器	口縁部の上位は内傾し、先端部は鋭角状を呈する。 器厚　口縁部　17mm 体部上位　16.5mm 中位　11mm	〔内器面〕 横ナデ後、強い指押え。 〔外器面〕　ナデ後、指押え。	〔色調〕　鈍い橙色。 〔焼成〕　堅緻。 〔胎土〕　白色粒の混入が目立つ。
143	土師系土器	平底。器壁は肉太。 器厚　体部中位　12mm 底部端部　13mm	〔内器面〕　強い横ナデ。 〔外器面〕　粗いナデ。	〔色調〕　鈍い橙色。 〔焼成〕　非常に堅緻。 〔胎土〕　精良。

第15表　出土遺物観察表⑮

No.	器　種	形態の特徴	文様・手法・調整	備　　考
144	土師系土器 （杯）	平底。 体部は直線的に伸びる。 復元口径　15cm 復元底径　12cm 器厚　体部上位　4mm 下位　8mm 底部中央　4mm	〔内外器面〕　横ナデ。 〔内外底面〕　丁寧なナデ。	軽質土器。 〔色調〕　褐灰色。 〔焼成〕　普通。 〔胎土〕　雲母の混入が目立つ。
145	土師系土器 （杯）	平底。 体部は丸味を帯びて口唇部で肥厚する。 復元口径　16.2cm 復元底径　13.4cm 器厚　体部上位　6.5mm 下位　7mm 底部中央　6.5mm 端部　3.5mm	〔内器面〕　丁寧な横ナデ。 〔外器面〕 極めて強いヘラナデの痕。 〔内底面〕　ナデ。 〔外底面〕　丁寧なナデ。	器面にススが付着。 〔色調〕　灰褐色。 〔焼成〕　普通。 〔胎土〕　精良。
146	土師系土器	平底。 体部は直線的に大きく開く。 器厚　体部中位　5.5mm 下位　7mm 底部中央　9mm	〔内外器面〕　丁寧なナデ。 〔内底面〕　丁寧なナデ。 〔外底面〕 ナデ。板状圧痕あり。	〔色調〕　鈍い橙色。 〔焼成〕　非常に堅緻。 〔胎土〕　精良。
147	土師器 （小皿）	外底面は丸味を帯びる。 形状は舟型。 口径 7.4cm　底径 5.3cm 器厚　体部上位　3mm 下位　3.5mm 底部中央　3.5mm	〔内外器面〕　横ナデ。 〔外底面〕　糸切り離し痕。	〔色調〕　乳白色。 〔焼成〕　堅緻。 〔胎土〕　精良。
148	土師器 （小皿）	外底面は丸味を帯びる。 形状は舟型。 口径 7.6cm　底径 5.2cm 器厚　体部上位　3mm 下位　3.5mm 底部中央　2mm	〔内外器面〕　横ナデ。 〔外底面〕　糸切り離し痕。	口縁部にススが付着。 灯明皿。 〔色調〕　乳白色。 〔焼成〕　堅緻。 〔胎土〕　精良。
149	土師器 （小皿）	外底面は丸味を帯びる。 形状は舟型。 口径 7.4cm　底径 4.7cm 器厚　体部上位　2mm 下位　2.5mm 底部中央　2mm	〔内外器面〕　横ナデ。 〔外底面〕　糸切り離し痕。	口縁部にススが付着。 灯明皿。 〔色調〕　乳白色。 〔焼成〕　堅緻。 〔胎土〕　精良。
150	硯	厚さ　5～8mm 残存の長さ　縦　12.9cm 横　4.4cm	――――	〔色調〕　灰黒青色。
151	硯	厚さ　1.7cm 残存の長さ　縦　13.9cm 横　6.4cm	――――	底面に「赤間関住」の人名が刻まれている。 〔色調〕　灰小豆色。
152	砥　石	厚さ　1.3cm 残存の長さ　縦　15.3cm 横　7cm	――――	〔色調〕　黄白色。

第16表　出土遺物観察表⑯



第24図　出土遺物実測図⑭

宝篋印塔　頭部

五輪塔　空風輪

五輪塔　火輪

五輪塔　水輪

〔調査区から表採された宝篋印塔・五輪塔〕

5．まとめ

〔1〕 検出遺構

建立された建物遺構は、規模等から、小規模なお堂と思われる。山裾に建設された単独の建物という事になる。寺の本体は別地点にあると考える。

現存する礎石は再建後のもので、それ以前に今より少し大きめの建物が存在した事も判明した。ちなみに周囲の地山の状況から地業土の下にこれを遡る遺構の存在は考えられない。お堂の周辺から墓坑は検出されなかった。

〔2〕 出土遺物

遺物は大半が肥前系の陶磁器で、時代は18世紀と19世紀のものにはっきりと二分される。前者が創建期の建物に伴うもので、後者が再建期のものと思われる。但し、最も早期のものは13～14世紀前半まで遡り、さらには15世紀後半～16世紀前半の中世遺物が含まれており、注意を要する。さらに図示しなかったが、五輪塔や宝篋印塔の残欠が藪の中に放置されていた事も記しておきたい。

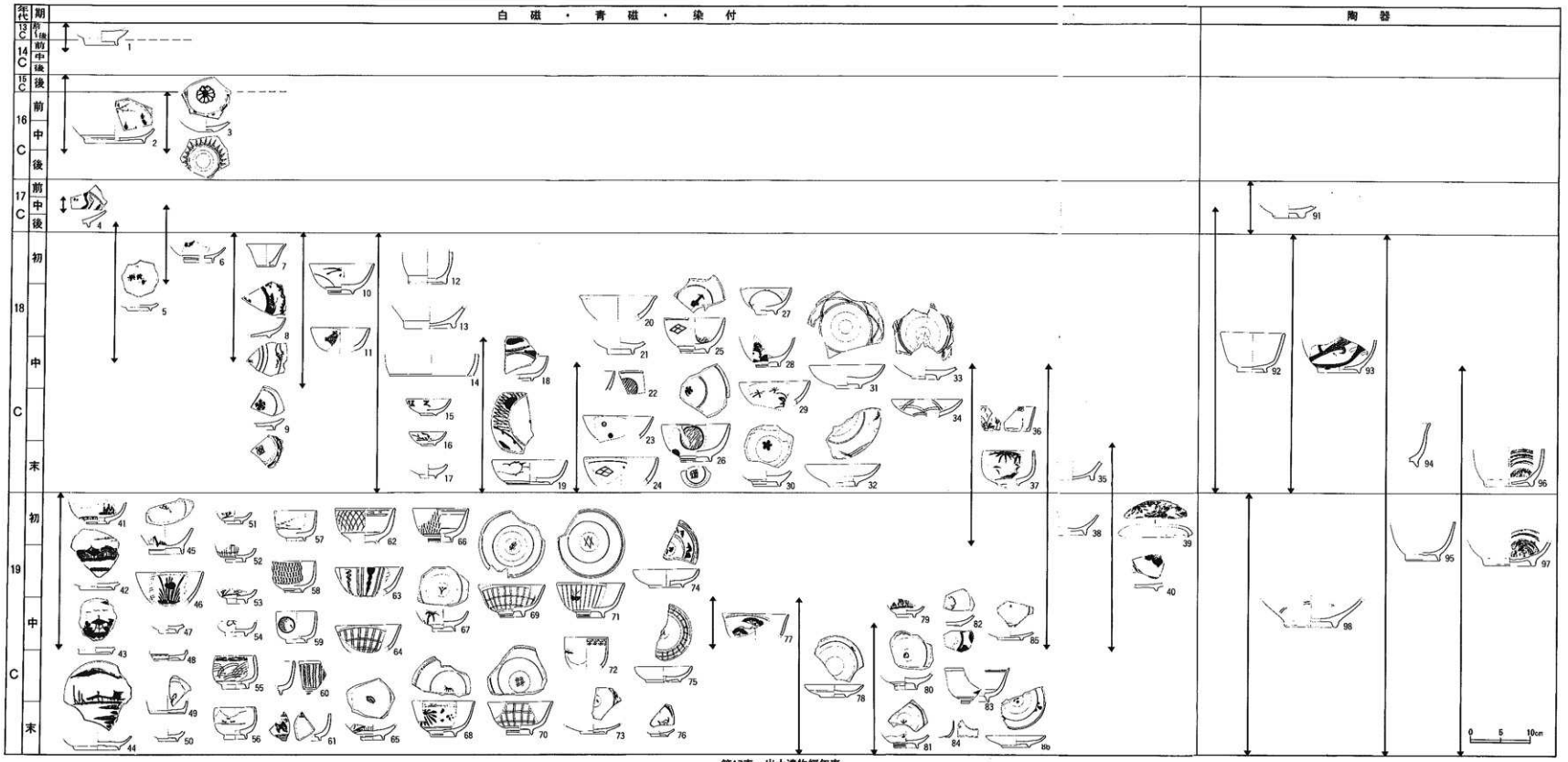
〔3〕 まとめ

①調査区の発掘調査結果からは「世尊寺が中世寺院」との確証は得られなかった。したがって、江戸期の文献にいう世尊寺跡は別の地点である事がわかる。江戸時代の中期になって、後発の世尊寺が再建されたのであろう。それも寺の建物は点在する状況にあり、調査区には、寺の一部のお堂が建設されたと考えるのが妥当である。

いずれにせよ、今の世尊寺跡から発見されたという鎌倉時代の仏像は、前身の廃寺となった世尊寺からの持込みによるものと思われる。中世遺物の出土や五輪塔などの残欠も同様な状況下にあると考えたい。

②今回、検出された礎石建物は寺のお堂で、創建期は18世紀の前期で、再建期は19世紀中葉頃であると推定される。

③付論で清田之長氏が指摘されている世尊寺411番地は、調査区の南側山中にある。弓状形を呈する凹地で、杉の植林地となっている。地表面に礎石の露呈は無いし、遺物の表採できない。



第17表　出土遺物編年表

〔付論〕世尊寺について

玉東町文化財保護委員長　清田之長

調査終了後、前田重治文化財保護委員より「玉名郡村誌に世尊寺についての記述があり、それには寺は411番地となっている。先般の発掘がなされた所は416番地である」との連絡があり、改めて玉名郡村誌を閲読した。この郡村誌は田邊哲夫先生の校訂により、昭和33年玉名民報社より刊行されたものである。

＊郡村誌の編集は明治５年４月陸軍の企画した全国地理図誌に始まり、９月太政官修史局に、ついで10年12月内務省地理局の手に移された。17年頃までに完稿するごとに正本は地理局に提出された。全国から集った冊数は6400冊というが、大正12年の関東大震災で罹災した。我が肥後国郡誌については、副本、または草稿と目されるものが46冊現存している。

田邊校訂　玉名郡村誌　215頁に

寺

世尊寺　東西七間、南北十四間四合、面積三畝十一歩、本町南字世尊寺四百十一番ニアリ。開基創立年月日不詳。真言宗ナリ。中世無住ノ際、修験玉巻院了順、豊後国ヨリ来リテ住職ス。干時慶長十八年丁癸丑四月ナリ、爾来相承。第十世玉養院歓道、明治五年壬申九月修験廃止。是ニ於テ同六年癸酉七月古老ノ伝ニ基キ住吉ニ復リ真言宗トナル。

とあり、早速、前田氏と共に現地踏査、さらに後日、狩野氏、続いて文化財保護委員、田邊先生、大田先生、事務局員揃って現地世尊寺411番を踏査した。

木葉村誌が記されたのは明治12年頃（物産、民業の統計が11年調、電線が12年調の註あり）であり、この時点では真言宗の世尊寺は実在していたのである。

同村誌（215頁－216頁）

古　跡

小森田城墟

についで

世尊寺跡　町ノ南字世尊寺ニアリ。真言宗ハ開基廃寺ノ年月不詳。一堂ニ薬師ノ像ヲ安置シテ、山伏玉養院之ヲ守リシガ、明治六年廃院。今無住トナル。

との記述がある。

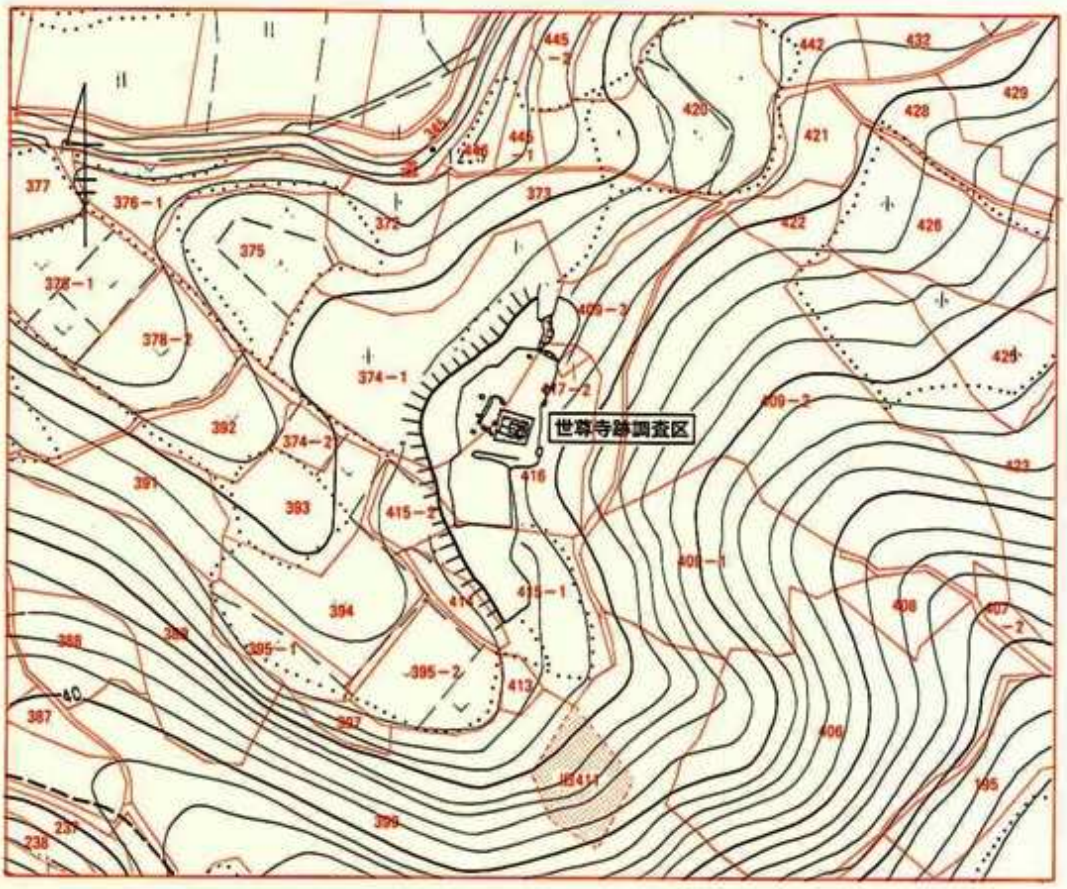
明治12年には現在実在の世尊寺の外に別の「世尊寺跡」が在ったこととなる。

字世尊寺416番地の世尊寺跡と411番地の世尊寺跡と、更に明治12年現在、古跡とされてい

る世尊寺跡との三ケ所に往昔寺院が建立されていたと解される。

昭和40年４月、玉東町営火葬場を字世尊寺に隣接する鴻ノ巣246番地に建設した時に、近隣から「布目瓦」が出土している。

字（村）に名を負わせる「世尊寺」は、往古は広大な境域に堂、塔、伽藍が建立されていたとも考えられる。



（注）現在、字世尊寺411番地は399番地に合筆されている。
旧字図より411番地を転写し、スクリーントーンで示した。

0　50　100m

第25図　世尊寺周辺地形図と地籍図

玉東町世尊寺発掘に伴うシンポジウム開催（記録）

日　時　平成６年１２月２９日（木）午後１時より

場　所　玉東町中央公民館　２階会議室

出席者　田邊哲夫、大田幸博、坂田幸之助、清田之長、上村　勲、児玉　博、前田重治、狩野昭巳、竹下晨吾、中島好幸、清田祐幸

中島好幸　玉東町世尊寺発掘調査検討会に公私多忙の中、お集り頂き感謝申し上げます。まず、竹下教育長があいさつ申し上げます。

竹下晨吾　玉東町世尊寺発掘調査検討会ご苦労様です。この後、有意義な検討会をお願い致します。

中島好幸　それでは田邊編集委員長お願い致します。

田邊哲夫　本日は大変ご苦労様です。今日、皆さんと世尊寺跡の調査現場を見学しましたが、これから、世尊寺について皆さんと検討会を進めていきたいと思います。私の方から若干の説明をしたいと思います。よろしくお願い致します。

発掘についての概報を別紙のとおり作成していますが、その中で建物１号は６つの礎石を伴い、建物２号と比べて少し小さいのであります。建物１号は瓦葺きのお堂みたいな建物が戦前まで建立していたと、町の大城戸清一郎さんが言われています。建物２号は４×３＝１２の丸い散石の集まっている根石穴を伴い、東西に４、南北に３の礎石が約１m間隔で並んでおり、それから、この発掘調査地点の南よりから近世初期と思われる染付が数多く遺物として採集されました。

さて、ここで考えなければならないのが、世尊寺跡の年代把握です。「肥後国誌」に世尊寺として、年代不詳という旨の記載があります。「玉東町史」編纂時の調査で、世尊寺にあったと伝えられる仏像が鎌倉期のものと鑑定されています。今回、発掘調査で江戸時代中期までしか遡（さかのぼ）らなくなると、その仏像はいったいどうなるのでしょうか。いろいろな事を考えなければなりません。

これで、私が思うのは建物１号・建物２号の下に、さらに古い建物の礎石の存在も考えられます。現在の礎石がある場所は、１m位上にあり、全体の高さから言えば、少し疑問視されます。

では、発掘調査の結果を整理してみたいと思います。まず、建物１号はどこまで遡るのでしょうか。廃物毀釈から考えるならば、寺と神社の関係が必ずある筈です。建物２号についてもどこまで遡るのでしょうか。肥後国誌だけで判断してよいので

しようか。さらに古い建物が本当にあるのでしょうか。ここで、皆さんからご意見を伺たい。

大田幸博　遺物からの所見では、江戸時代中期までしか遡れないと考えます。

清田之長　宝篋印塔の頭部が表採されていますが、どう考えられますか。それから、鉄の吊り鈴が過去に出土していますので、それから、建物の大きさが判明するのではないでしょうか。

前田重治　五輪の塔はどれくらい遡るのですか。

田邊哲夫　五輪の塔は鎌倉初期から近世初期までの長い間作られて来ました。五輪の塔は時代によって一石五輪の塔から五輪になっています。今回、世尊寺跡から表採された五輪は新しいもののような気がします。それから鉄の吊り鈴も今後考えていきたい。文書ではどこまで遡るのでしょうか。

前田重治　国郡一統誌には「世尊寺　薬師共二所」とあります。

田邊哲夫　国郡一統誌を皆さんで見てみましょう。永青文庫の検地帳はどこまで遡るのでしょうか。

清田祐幸　寛永12、13年（1635）の永青文庫の検地帳に世尊寺平という地名が出てまいります。

狩野昭巳　田邊先生が出された西安寺報告書の中に西安寺文書がありますが、この中に、享禄3年（1530）に南山北郷が出てきて、これは堺論争争いでありますが、この文中に二俣の庄原之山崎から大楠河落合を通り世尊寺の堀切を通り、下口村に続いている。これが、世尊寺の南山北郷の範囲であると記されている。

前田重治　田邊先生、世尊寺がここで文書に出てきます。

児玉　博　下口村とはいったいどこでしょうか。

坂田幸之助　二俣の庄原之山崎から大楠河落合とはいったいどこでしょうか。

田邊哲夫　二俣の庄原之山崎は現在の二俣であり、大楠河落合とは、大きな川と川が合流する地点であり、公民館のすぐ隣の白木川と木葉川が合流する地点ではないかと思います。最後の下口村はよくわかりません。

坂田幸之助　八嘉ではないか。でも下口村という地名があるのだろうか。

狩野昭巳　白木の中にないのだろうか。

児玉　博　世尊寺の隣はなんと言うのだろうか。

狩野昭巳　現在「折口」という字があります。

田邊哲夫　そうかもしれない。でないと二俣から場所が遠く離れ過ぎている。

さて、この堀切の問題であります。現在の段階で世尊寺の場所を確定する有力な手かがりに堀切があるのですが。

坂田幸之助　直接的には結びつかないと思いますが、この前の予備調査の時、下の田から溝が出てきました。

田邊哲夫　どこかに堀切はないのですか。

清田祐幸　そうではないのですが、世尊寺発掘調査地点の上、木葉と山北の堺の山に小道らしい堀切があるのです。

田邊哲夫　そうかもしれない。堀切がはっきりすれば、年代も場所も確定できるのだが。今後煮詰めて頂きたい。

さて、最初に言いました、廃物毀釈から考えるならば、寺と神社の関係が必ずあるはずです。私は世尊寺と木葉の春日神社の関係が非常に密であると考えます。それは、木葉の春日神社の鳥居から直線ではっきり世尊寺が見渡せます。その位置とは、南に世尊寺、北に木葉の春日神社、とても興味ある位置関係です。神社と寺を関係するとき、修験を考えなくてはなりません。それから世尊寺の仏像が薬師であることです。世尊寺には正式な名称がありますか。

前田重治　頼順房、醍醐寺三宝院と言われています。

清田之長　稲佐廃寺と熊野神社の関係は。

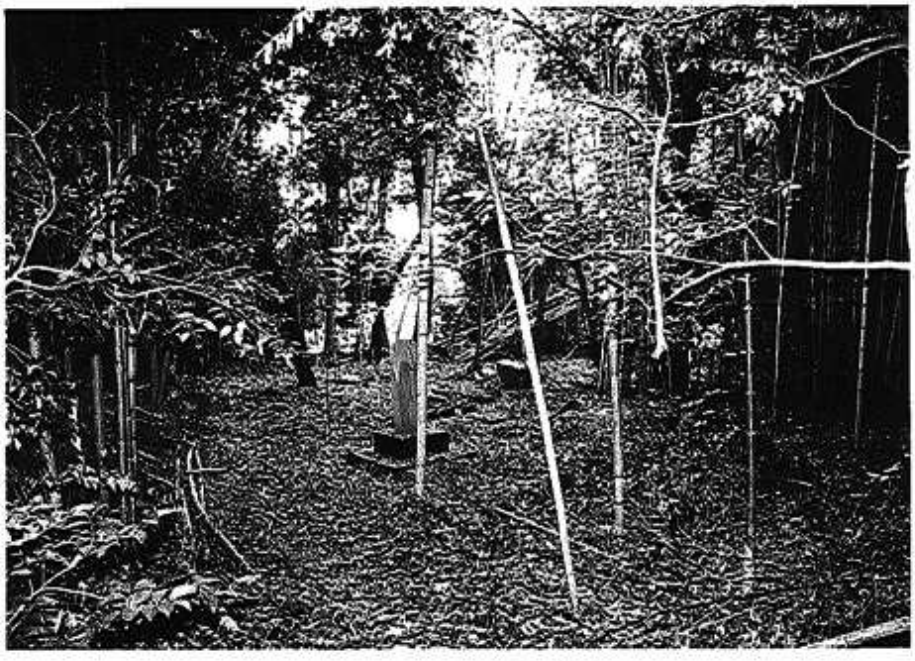
田邊哲夫　稲佐熊野神社のガランサンはあります。竜光寺もあります。別の場所にありますから、考えられます。

狩野昭巳　西安寺と白山宮の関係であります。西安寺焼亡が慶長二年（1597）であります。

田邊哲夫　それでは今回の検討会のまとめをしたいと思います。今回の発掘で中世遺物が出土しました。しかし、鎌倉までは遡れません。ここから世尊寺の位置と仏像の移動説がでてくるのではないでしょうか。真の世尊寺は別の地点にあると考えます。

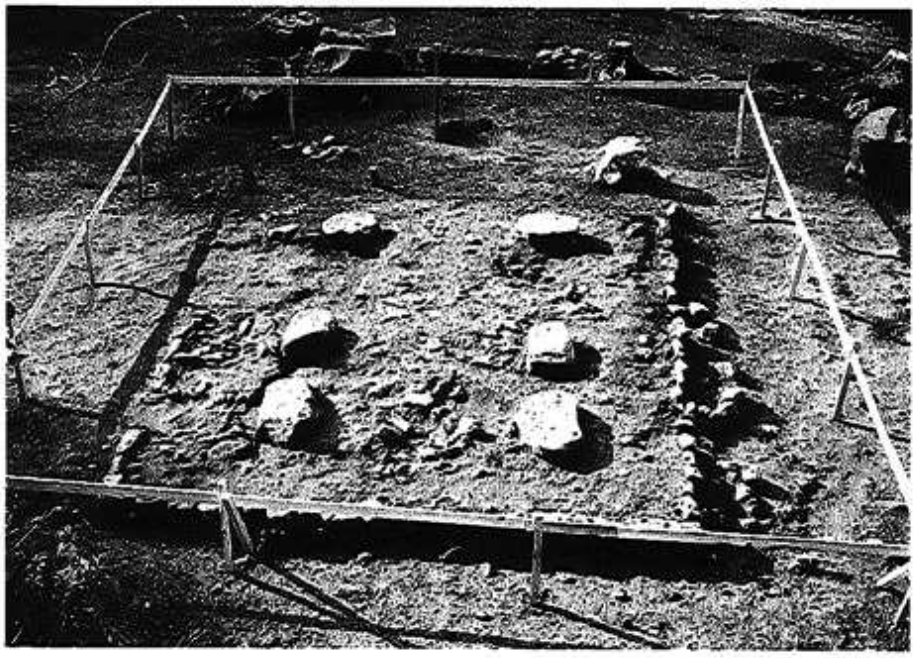
写　真　図　版

図版 1　調査区伐採作業①



図版 2　調査区伐採作業②

図版 3　調査区北側



図版 4　建物 1・建物 2

図版5　建物2　根固め石（S7）

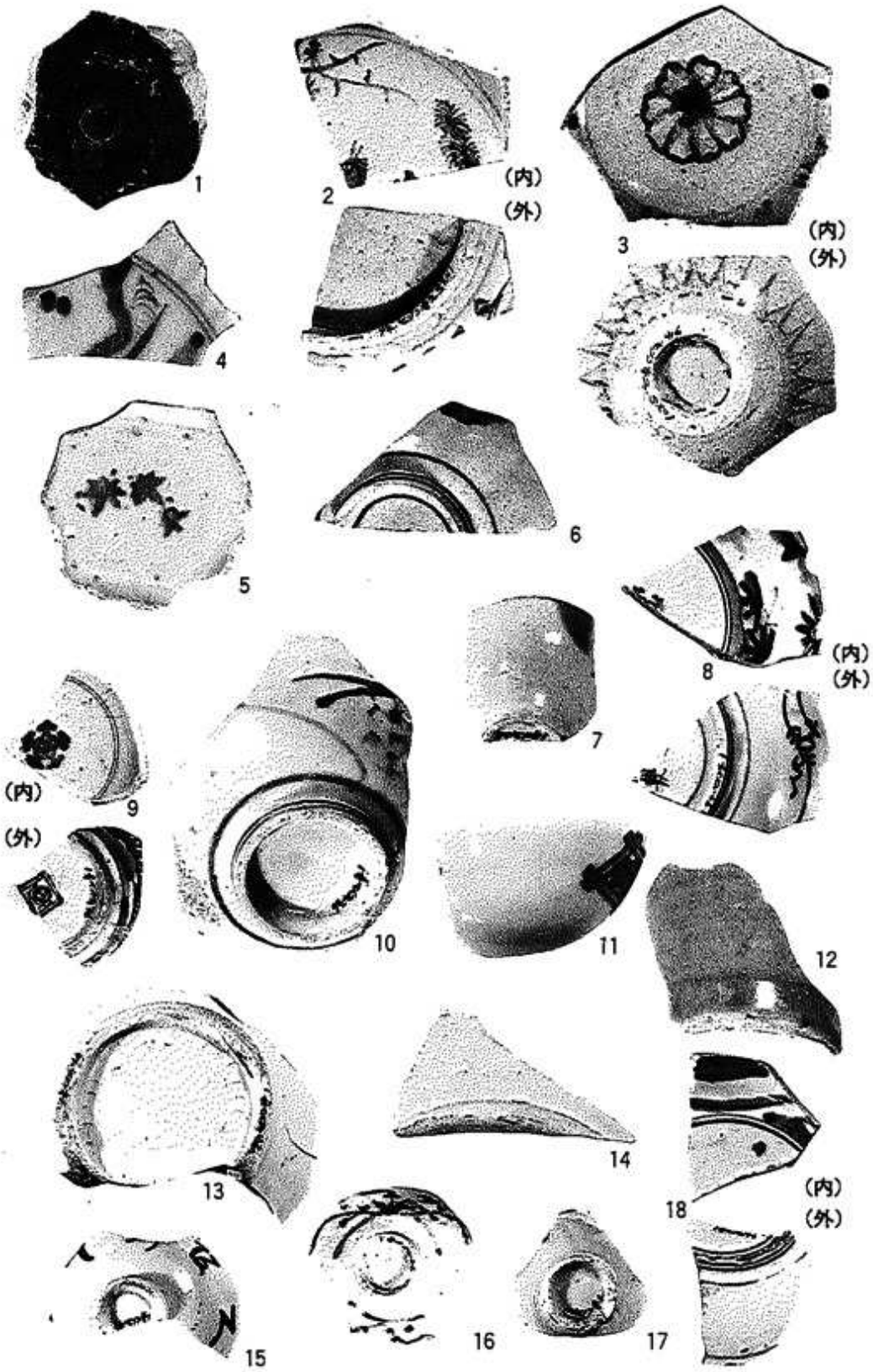
図版6　建物2　根固め石（S14）

図版7　調査区東側から西側を望む

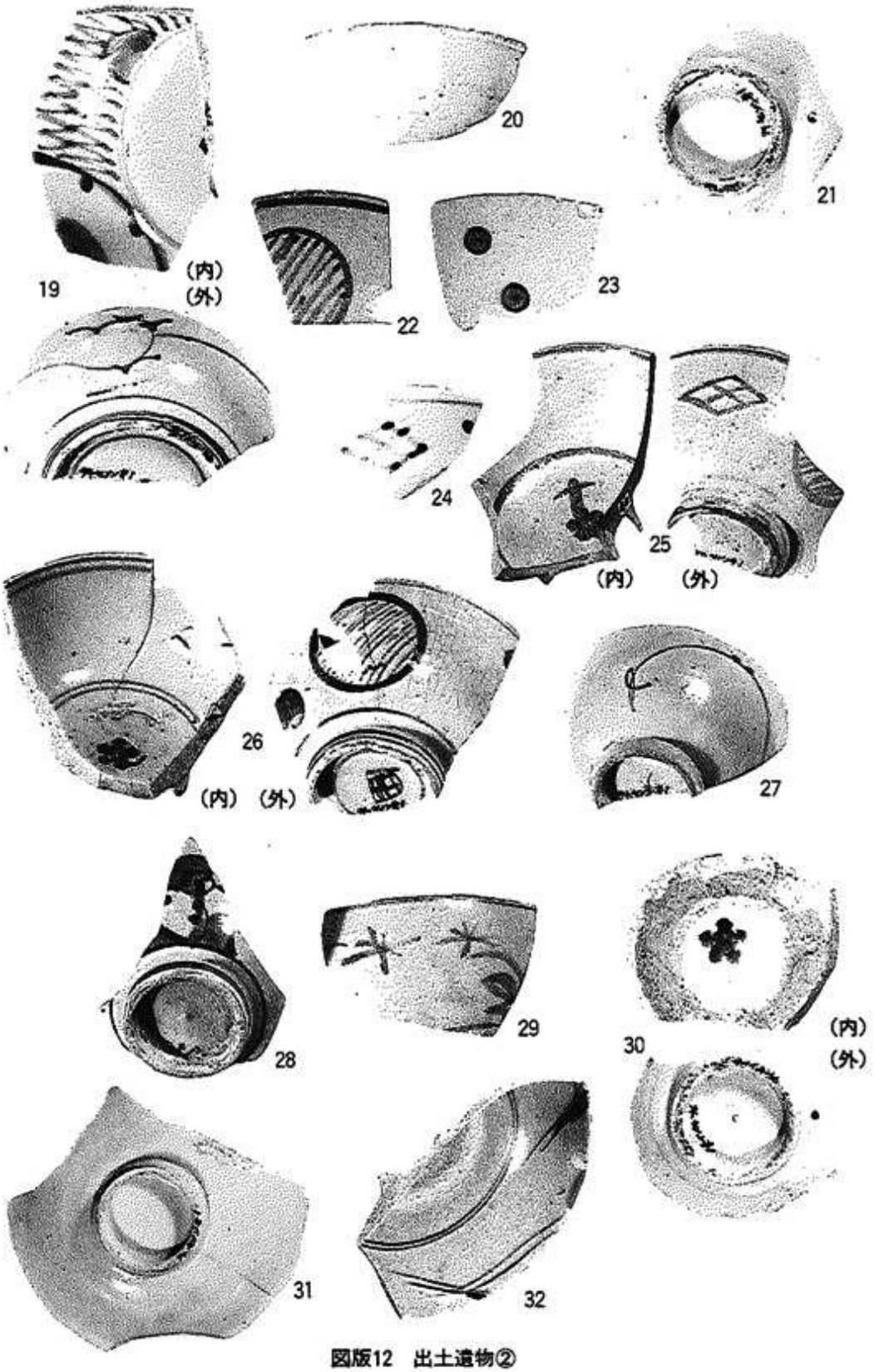
図版 8　古井戸

図版 9　試掘地点（手前の平場。中央右側の薮が本調査区）

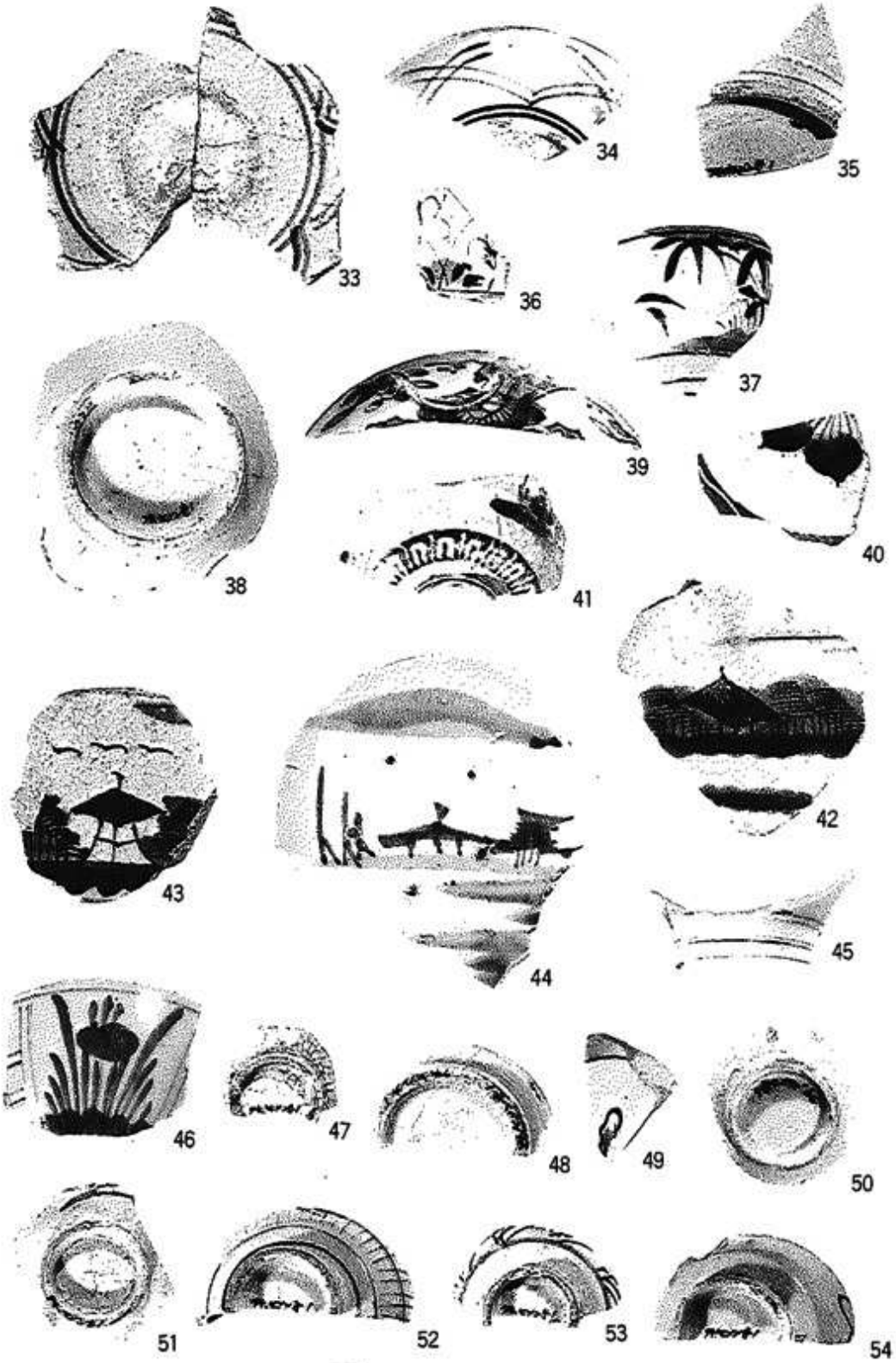
図版10　建物 1 と石碑



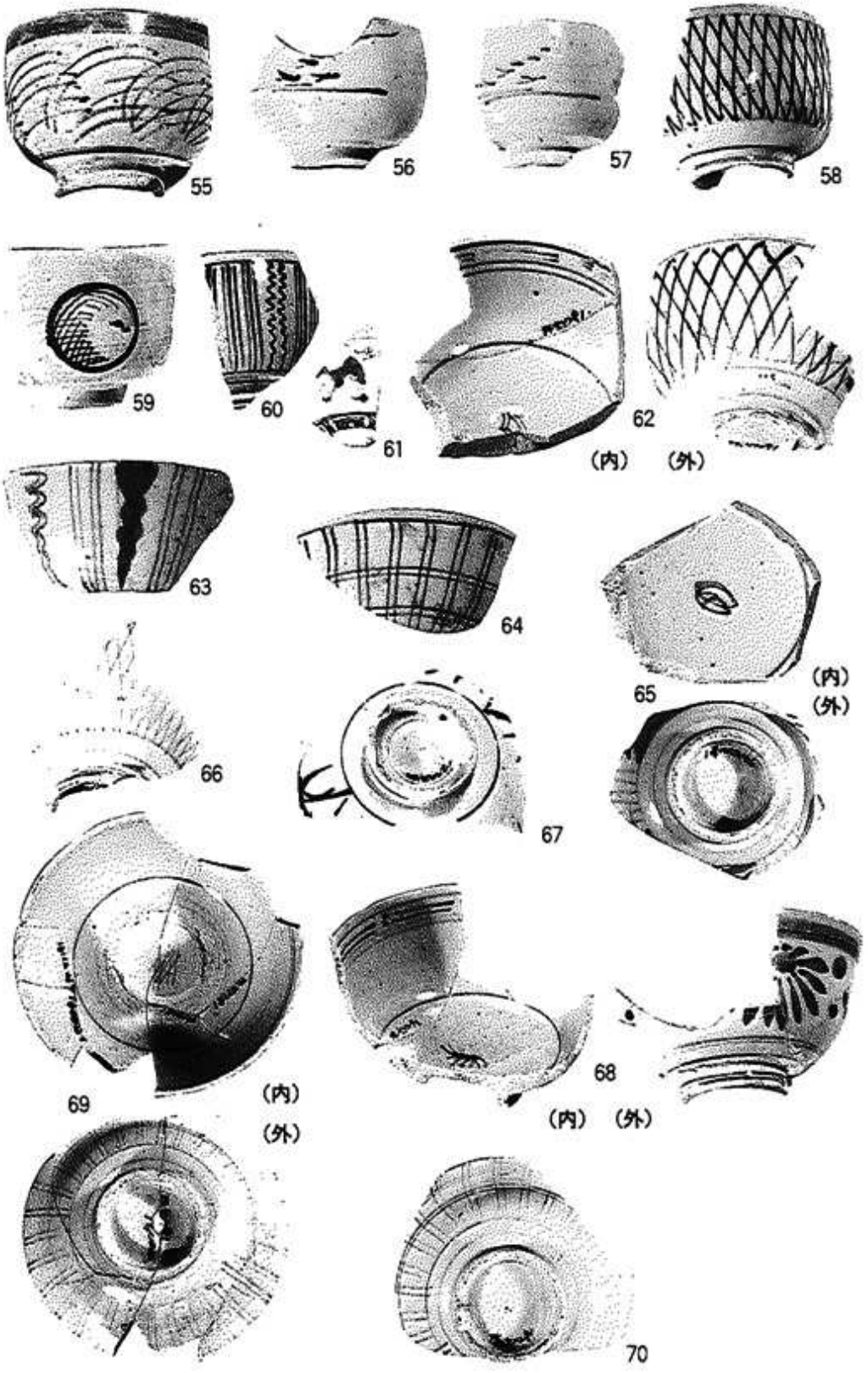
図版11　出土遺物①



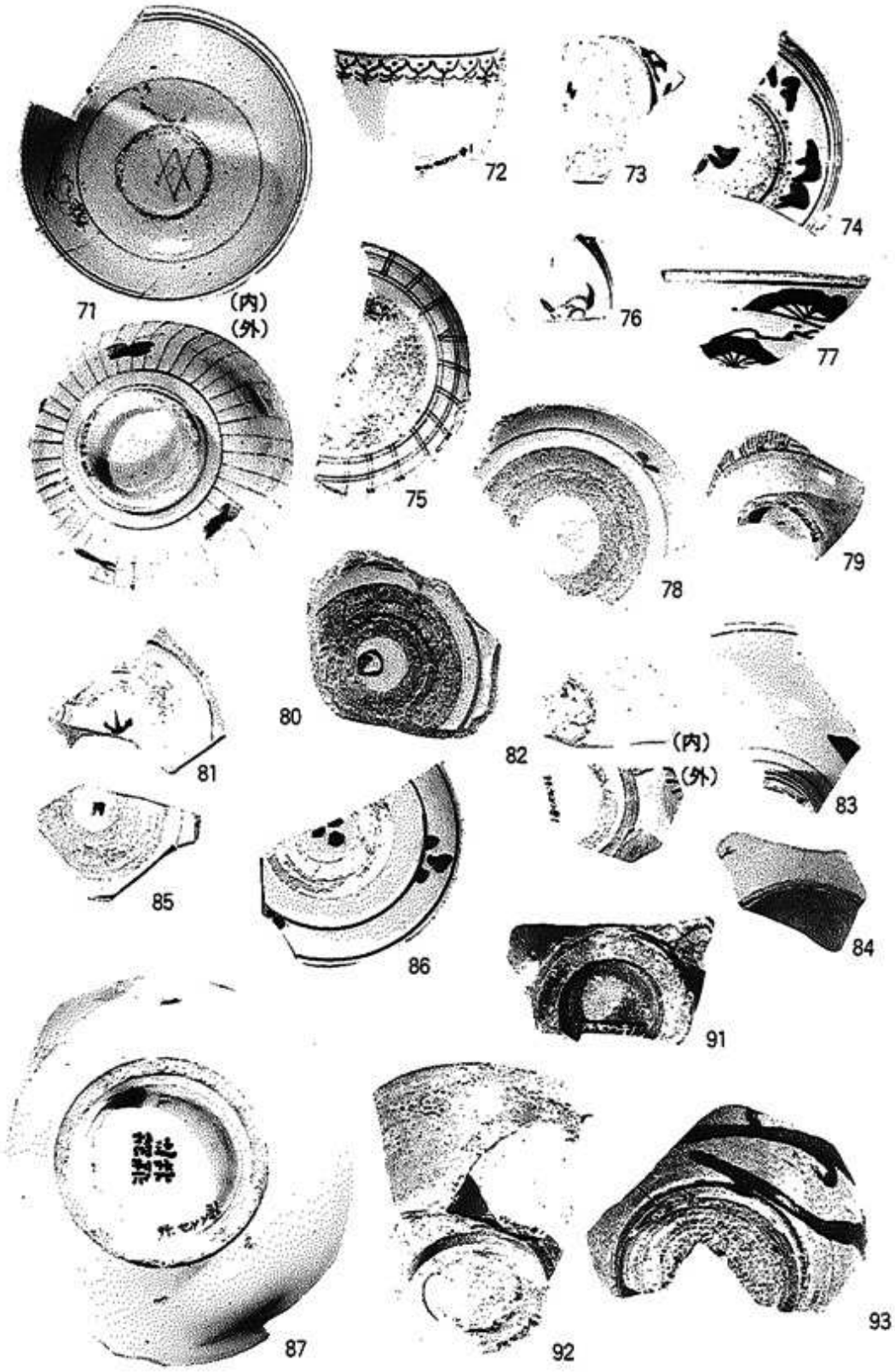
図版12　出土遺物②



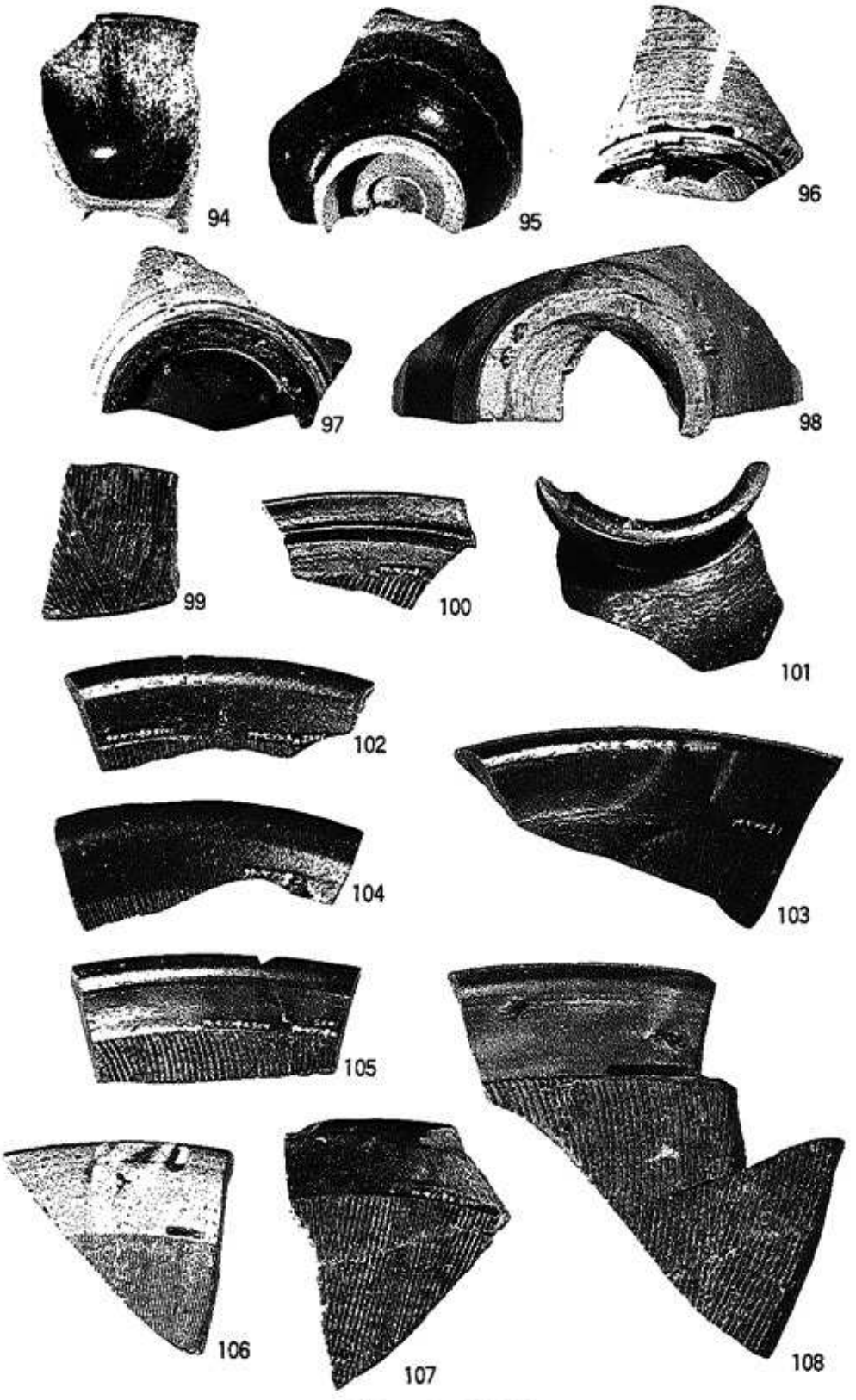
図版13　出土遺物③



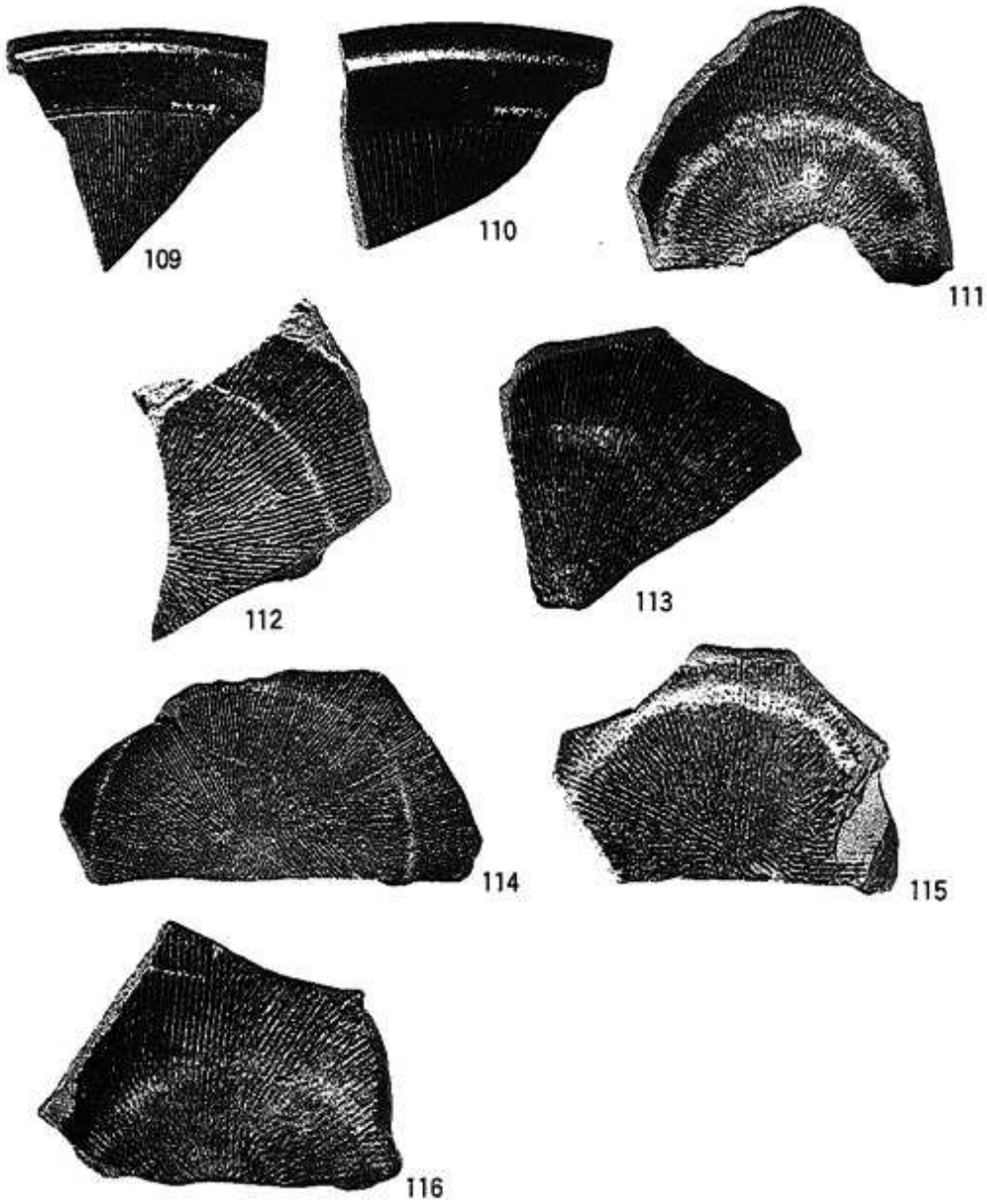
図版14　出土遺物④



図版15　出土遺物⑤



図版16　出土遺物⑥



図版17　出土遺物⑦

玉東町文化財調査報告　第 3 号

（伝）世　尊　寺　跡

平成７年３月３１日

〔編集・発行〕
玉東町教育委員会
〒869-03　熊本県玉名郡玉東町白木1－1
☎　0968－85－3609

〔　印　刷　〕
㈱大和印刷所
〒862　熊本県熊本市戸島町920－11
☎　096－380－0303